兵庫県文化財調査報告　第421冊

三田市

三　田　城　跡　Ⅲ

県立有馬高等学校講義棟新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２４（２０１２）年３月

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第421冊

三田市

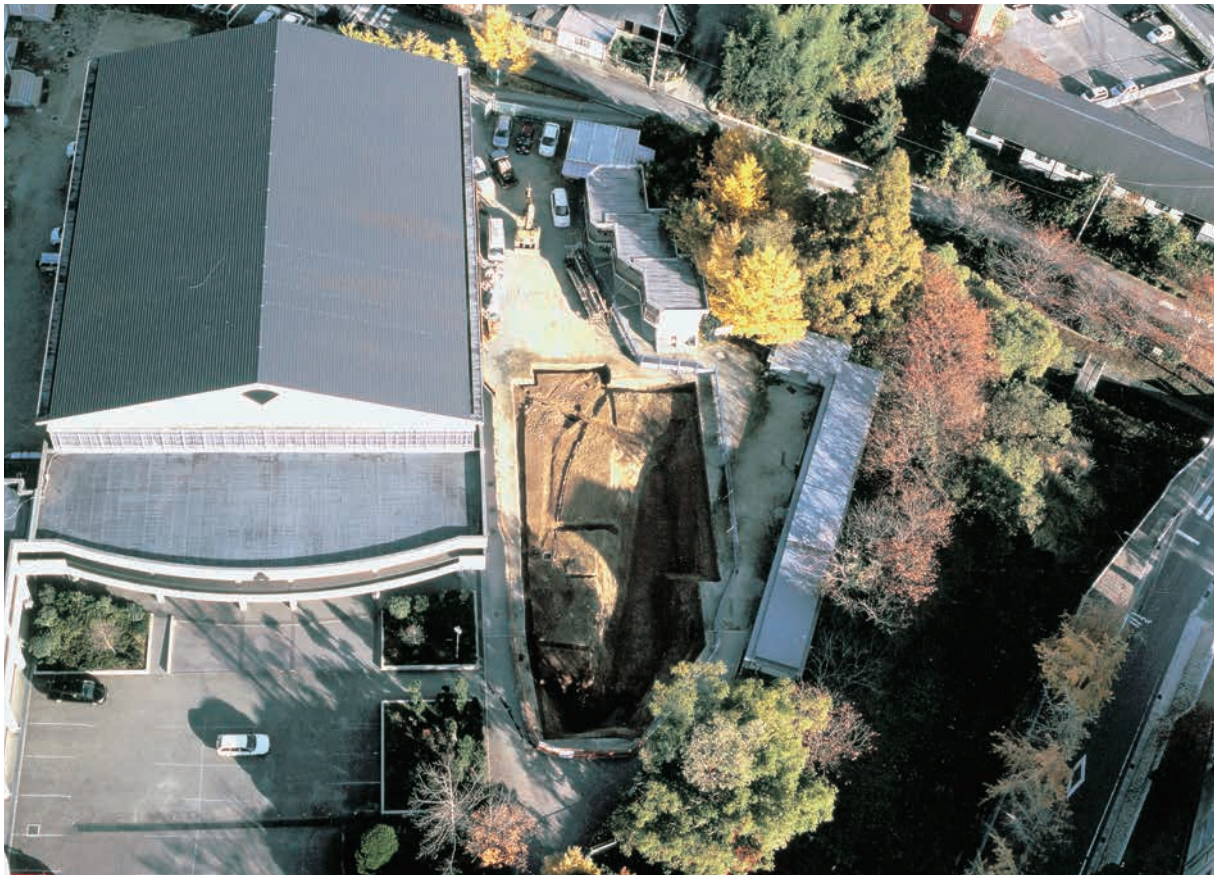
三　田　城　跡　Ⅲ

県立有馬高等学校講義棟新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２４（２０１２）年３月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（南東から）



遺跡全景（西から）

例　　言

1．本書は兵庫県三田市天神に所在する三田城跡の発掘調査報告書である。兵庫県文化財調査報告の第421冊にあたる。
2．発掘調査は県立有馬高等学校講義棟新築事業に伴うもので、兵庫県教育委員会が調査主体となって調査した。
3．発掘調査は、平成19年度に兵庫県教育委員会が実施し、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部　吉識雅仁・小川弦太が担当した。
4．遺構の実測は、調査員が行った。遺構の製図及び遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部嘱託員が行った。
5．写真は遺構を調査員が撮影し、遺物については株式会社地域文化財研究所に委託した。
6．本書の挿図第２図「周辺主要遺跡」は、『兵庫県遺跡地図』（平成23年３月発行）を使用した。
7．本書の執筆は第２章第３節は村上泰樹が行い、その他は全て小川が行った。なお、編集は非常勤嘱託職員尾鷲都美子の協力を得て小川が行った。
8．調査で出土した遺物・写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物において保管している。

凡　　例

1．遺物は種類ごとに通し番号を付けているが、金属器はM、木製品は W、石製品には Sを冠し、土器との区別を行っている。
2．土器は種別によって断面の表現を変え、弥生土器、土師器は白抜き、須恵器は黒塗り、陶磁器は網かけで示している。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査にいたる経緯
　第２節　発掘作業の経過
　第３節　整理等作業の経過
第２章　遺跡の位置と環境……2
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第３章　調査の方法と成果……5
　第１節　調査の方法
　第２節　遺構
　　１．第１面上層
　　２．第１面下層
　　３．第２面
　第３節　遺物
　　１．遺構出土の遺物
　　２．包含層出土の遺物
第４章　総括……33

挿　図　目　次

第１図　調査位置図
第２図　周辺の遺跡
第３図　調査位置図
第４図　第１面上層平面図
第５図　北壁土層図
第６図　東壁土層図
第７図　土塁盛土東西土層図
第８図　土塁盛土南北土層図
第９図　石列立・平面図
第10図　SK5
第11図　集石　SK1
第12図　第１面下層平面図
第13図　SD3
第14図　第２面平面図
第15図　SK6
第16図　SK8
第17図　P46
第18図　SK1出土土器
第19図　SD1出土土器
第20図　SD3出土土器・瓦
第21図　SD4出土石製品
第22図　堀内出土土器
第23図　堀内出土軒丸瓦
第24図　堀内出土軒平瓦
第25図　堀内出土丸瓦・平瓦
第26図　土塁内出土土器(1)
第27図　土塁内出土土器(2)
第28図　土塁内出土土器(3)
第29図　土塁内出土瓦・硯
第30図　SK6出土土器
第31図　SK7出土土器
第32図　SK8出土土器
第33図　P41出土瓦
第34図　P46出土木製品
第35図　包含層出土土器
第36図　包含層出土銭

表　目　次

表１　周辺遺跡一覧表
表２　出土瓦詳細観察表
表３　出土遺物観察表

図　版　目　次

写真図版１　遺跡遠景（南東から）
遺跡全景（西から）
写真図版２　第１面上層全景（西から）
第１面上層全景（東から）
写真図版３　第１面上層（西から）
第１面上層（東から）
写真図版４　第１面下層（西から）
第１面下層（東から）
写真図版５　第２面全景（西から）
第２面全景（東から）
写真図版６　盛土セクション北部分（南西から）
盛土セクション全景（南東から）
盛土セクション全景（南西から）
写真図版７　盛土セクション２（東から）
盛土セクション３（東から）
盛土セクション４（東から）
盛土セクション５（東から）
空堀断面（南から）
堀断面（東から）
写真図版８　土坑SK1全景（東から）
土坑SK1断面（東から）
土坑SK1完掘（東から）
写真図版９　土坑SK5断面（東から）
溝SD1（東から）
溝SD3全景（南から）
写真図版10　溝SD3溝内の石検出状況
溝SD3完掘（南から）
溝SD4礫検出状況
写真図版11　溝SD4畦（東から）
溝SD5畦（東から）
柱穴P8断面（東から）
柱穴P9断面（南西から）
柱穴P17断面（南から）
写真図版12　石列（東から）
石列（北東から）
石列　平石状況（北から）
石列断面
石列の裏状況（南から）
写真図版13　土坑SK6　石検出状況（南から）
同上　全景（南から）
同上　断面
写真図版14　柱穴P22断面（南から）
柱穴P46（東から）
同上　完掘
写真図版15　SK1出土土器
SD1出土土器
SD3出土土器
写真図版16　SD3出土瓦
SD4出土石製品
堀内出土土器
写真図版17　堀内出土軒丸瓦
写真図版18　堀内出土軒平瓦
写真図版19　堀内出土丸瓦・平瓦
写真図版20　包含層出土銭
土累内出土土器
写真図版21　土累内出土土器
写真図版22　土累内出土土器
土累内出土瓦・硯
写真図版23　SK6・SK7出土土器
SK8出土土器
写真図版24　P41出土瓦
P46出土木製品
包含層出土土器
写真図版25　包含層出土土器

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

兵庫県教育委員会は、県立有馬高等学校敷地内において、講義棟新築事業の計画を進めた。事業予定地を含む県立有馬高等学校敷地全体は周知の埋蔵文化財包蔵地である三田城跡および古城遺跡が存在する。そのため、兵庫県教育委員会からの依頼により、平成19年７月に確認調査を実施した。その結果、講義棟新築予定地に三田城堀跡を確認し、同年10月から本発掘調査を開始した。

第２節　発掘作業の経過

確認調査

遺跡調査番号　2007092

調査担当者　深江英憲

調査期間　平成19年７月26日

調査面積　24㎡

講義棟新築予定地、駐輪場設置予定箇所に６箇所のトレンチを設定し調査を行った。その結果、講義棟新築予定地で堀状の遺構を確認した。

本発掘調査

遺跡調査番号　2007100

調査担当者　吉識雅仁・小川弦太

調査期間　平成19年10月14日～12月18日

調査面積　599㎡

講義棟新築予定地の本発掘調査を行った。調査は、江戸期（第１面上層）、中世～江戸期（第１面下層）、弥生時代中期～中世（第２面）の３面を行った。それぞれの面から、三田城の堀跡、土塁、溝、土坑、柱穴、弥生時代の土坑などを検出した。

第３節　整理等作業の経過

出土遺物の洗浄、ネーミングは魚住分館で実施し、報告書刊行までの本格的な整理作業（遺物実測、復元、トレース、図版作製など）は兵庫県立考古博物館で実施した。

出土品整理作業

平成23年４月１日～平成24年３月31日

兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存課

事務担当：村上泰樹・篠宮正・宮嶋典美

作業担当：山本誠・深江英憲・岡本一秀

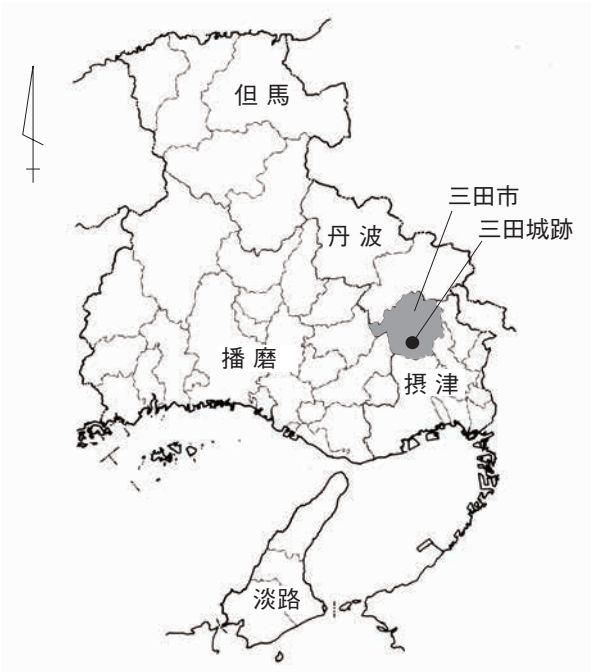
尾鷲都美子・西口由紀・小林陽子・三好綾子・嶺岡美見・吉村あけみ

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

三田城跡のある兵庫県三田市は、県南東部にあり、阪神間のベッドタウンとして発展した人口11万人、面積210㎢の市である。武庫川中流域に細長く形成された三田盆地に位置し、瀬戸内型内陸気候にあたる。

三田盆地には河岸段丘が多くあり、遺跡が立地する盆地南部の天神台地もそのひとつである。この河岸段丘面は北西方向に丘陵地形が伸び、北部は武庫川の侵食作用により比高差20mの崖面となる。この段丘上は平坦面であり、現在は住宅地や耕作地が広がり、南接する西山－屋敷町台地と合わせて、近世には陣屋・武家屋敷が営まれる。



第１図　調査位置図

第２節　歴史的環境

三田盆地における人類の生活痕跡は後期旧石器時代までさかのぼることが確認されている。この時代の遺跡は、溝口遺跡、青野ダム遺跡群に見られる。

縄文時代の遺跡は、石器の出土した宅原遺跡、晩期の溝が確認された対中遺跡がある。

弥生時代では前期後半に出現する三輪・餅田遺跡がある。この集落遺跡は、三田盆地における中核的な集落であり、石製穂積具の製作地であったと考えられている。中期後半では、平方遺跡、奈カリ与遺跡などがあり、平方遺跡では住居跡から小型銅鐸の鋳型が出土している。後期は中期の遺跡が継続し、さらに盆地全体に数が増える。

古墳時代では前期から中期の古墳では目だったものは発見されておらず、集落についても同様である。後期では低地部にある貴志・樋戸遺跡、桑原遺跡、高次・北ノ垣内遺跡などや、丘陵部に立地する奈良山遺跡、平方遺跡、平方西遺跡などがある。古墳群は、武庫川両岸の丘陵上に築かれる。

飛鳥～奈良時代の遺跡は、有馬郡衙推定地とされる宅原遺跡や白鳳時代の創建と考えられる金心寺廃寺があり、その周辺の屋敷町遺跡などでは同時期の集落跡が見つかっている。古代有馬郡の中心地であったと考えられる。また、貴志・下所遺跡では「満」銅印が出土し、奈良山遺跡では鍛冶工房跡が発見されている。盆地北部の末地区では須恵器窯跡が見つかっているが、平安時代になると衰えてしまう。

鎌倉、室町時代にかけて集落の再編が進み、盆地内の条里制地割が完成したと考えられている。南北朝の終わり頃には国人有馬氏が台頭する。盆地内の低地部や丘陵上には中世城館があり、国人有馬氏の城ではないかと考えられているが、実態はつかめていない。三田城も南北朝時代に赤松円心の四男氏範が基礎を築き、有馬氏祖の義祐が修築したとされる説や五代有馬則景の時に築かれたとする説があるな

表１　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　　代	番号	遺　跡　名	時　　代
1	三田城(三田藩陣屋)跡	奈良時代～近世	23	前中屋敷跡	中世
2	古城遺跡	弥生時代～古墳時代、中世	24	福島･上龍王谷墳墓群	近世
3	天神遺跡	弥生～古墳時代､平安時代､中世～近世	25	大原・天神ノ尾城跡	中世～近世
4	池ノ首遺跡	奈良時代、中世～近世	26	川除・竹ノ下遺跡	古代～中世
5	屋敷町遺跡	奈良時代～近世	27	茶臼山城跡	中世
6	大池ノ南遺跡	中世～近世	28	三輪上野窯跡	近世
7	西山・芳ノ塚遺跡	古墳時代～中世	29	天狗ヶ鼻窯跡	近世
8	西山垣内遺跡	中世～近世	30	三輪明神窯跡	近世～近代
9	平家垣内遺跡	古墳時代、中世～近世	31	三輪・宮ノ越遺跡	弥生時代～古墳時代、中世～近世
10	南が丘打上り遺跡	中世	32	三輪・餅田遺跡	弥生時代～古墳時代、中世
11	屋敷町西方寺裏山窯跡	近代	33	三輪明神前窯跡	近世～近代
12	三田谷遺跡	中世	34	高次・北ノ垣内遺跡	弥生～古墳時代､平安時代､中世～近世
13	下深田・坂ノ下遺跡	弥生時代、中世～近世	35	下田中城跡	中世
14	川除遺跡	弥生時代～古墳時代、中世	36	対中遺跡	縄文時代～中世
15	下深田遺跡	弥生時代、平安時代～中世	37	立石城跡	中世
16	下深田・城戸遺跡	弥生時代、平安時代～中世	38	丈ヶ岡城跡	中世
17	稲田城居館跡	中世～近世	39	沢ノ辻城跡	中世
18	貴志遺跡	弥生時代～近世	40	横山城跡	中世
19	貴志・樋戸遺跡	弥生時代～近世	41	塩田遺跡	弥生時代～中世
20	五良谷城跡	中世	42	北神 NT №4遺跡	弥生時代
21	貴志・下所遺跡	古墳時代～近世	43	宅原遺跡群	弥生時代～中世
22	貴志居館跡	中世			

ど明らかでない。三田城が城として整備された時期が判明しているのは、天正年間に荒木氏が三田の支配を始め、荒木平太夫が城主となった時である。荒木氏が織田信長に背くと天正六年に織田軍に攻められ落城する。その後、池田氏、三好氏の支配を経て、天正十年（1582）から山崎氏二代の支配を受ける。この時、三田城は瓦葺の織豊系城郭として整備された。関ケ原の戦いにおいて西軍についた山崎氏は、因幡若桜に転封され、東軍だった有馬則頼が入封する。しかし、有馬則頼の支配も短期間に終わり、その後20年以上も福知山城主有馬豊氏の預かり領となり三田城は荒廃が進む。寛永三年（1626）に有馬豊氏が筑前久留米に移封となると、松平重直が出羽国より入封するが、寛永十年（1633）には豊前国へ移封となる。同じ年に九鬼氏が三田に入封し三万六千石を治める。九鬼氏は、従来の三田城を廃して古城とし、城域の南部と西部を三田陣屋として整備した。その後、明治四年（1871）まで九鬼氏十三代が三田藩主として有馬郡を支配した。

参考文献
兵庫県教育委員会『三田城跡発掘調査報告書』（2000）
兵庫県教育委員会『三田城跡Ⅱ』（2009）
三田市史編さん専門委員『三田市史　第３巻　古代・中世資料』（1998）

第２図　周辺の遺跡

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

確認調査の結果から、講義棟建設予定地全域を本発掘調査することになった。調査区は生徒用の駐輪場であったため、アスファルトを撤去した後、バックホーにて堆積土の掘削を行った。

遺構面は当初１面と考えていたが、最終的に第１面上層、下層、第２面の合計３面の調査を行い、各遺構面検出後は高所作業車を使用し、検出面の全景写真撮影を行った。

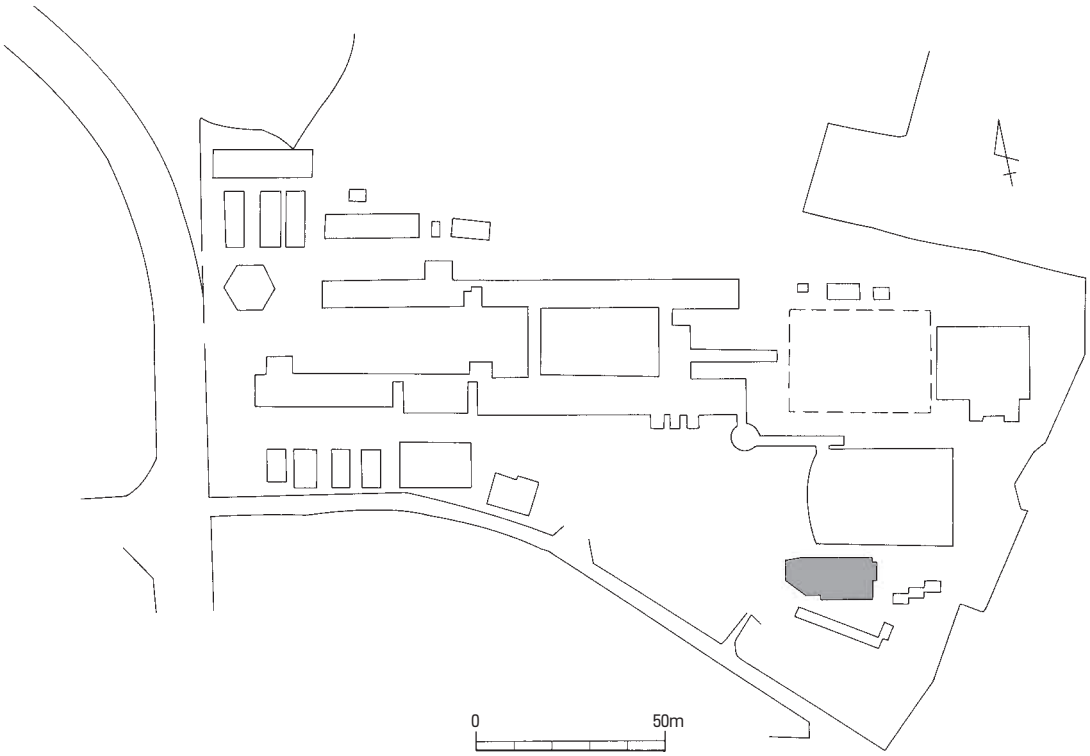
調査中は、随時平板測量により遺構の検出状況の記録を行っている。土坑などの個別遺構については主に1/20で実測図を作成し、適宜写真による記録も行った。

調査区全体の測量として、第１面上層検出時、第１面下層検出時に、ヘリコプターによる空中写真測量を行い、遺跡の遠景空中写真や全景写真、地形データの記録を行った。

調査期間中、立ち入り防止柵に調査内容を解説した看板を取り付け、調査状況の周知を行った。また、第１面上層検出時に有馬高校の生徒を対象とした遺跡の説明会を行い、２クラス70名ほどの生徒及び教職員が現場を訪れた。

第２節　遺構

調査区は、学校建設のために地形の改変が大規模に行われており、堆積物のほとんどが人工的なものである。遺跡の基盤層となるのは基本的に黄褐色シルト質極細砂層であり、弥生から中世段階の遺構（第２面）はこの面で検出している。基盤層の上には15世紀から16世紀後半の遺物を含む土塁盛土、16世紀



第３図　調査位置図

以降現代までの整地層が３層認められる。今回確認した整地層は、15～16世紀代と考えられる北壁の44層、46層、近世と考えられる北壁の45層、近代以降となる北壁の６層となる。この６層は広く堆積しており、近代以降行われた有馬高校整備に伴う造成によるものと思われる。

これまで三田城内で兵庫県教育委員会が行った調査のうち、今回の調査地に近い場所としては、北側に隣接する体育館建設に伴う平成７年度の本発掘調査[1]とプール水槽の基礎工事等に伴う平成17年度の本発掘調査[2]がある。平成７年度の調査では２層７面Ⅷ期の遺構面、平成17年度の調査では１面の遺構面を確認し部分的に２層の整地面を検出している。

（註）
⑴兵庫県教育委員会『三田城跡発掘調査報告書』（2000）
⑵兵庫県教育委員会『三田城跡Ⅱ』（2009）

１．第１面上層

近現代の整地層を除去し検出した面である。北壁土層図44層上面で検出した。石列より北側には、近世の整地層が存在する。堀、土塁、溝４条、土坑５基、柱穴を検出した。主要なものを以下に報告する。

堀（第５図　写真図版７）

調査区西端の南北方向の堀と調査区南の東西方向の堀を検出した。２つの堀は調査区内で合流しており、いずれも現地表から５ｍ以上の深さがあるが、幅は調査区外となり不明である。

南北方向の堀は空堀だと考えられる。この堀は、安政二年（1855）の絵図では南半分が描かれておらず、江戸末期までに埋没していることが分かる。

東西方向の堀は、調査区南東部で南へ曲がり調査区外へと続く。調査区の南東部が掘への張り出し部分になる可能性がある。

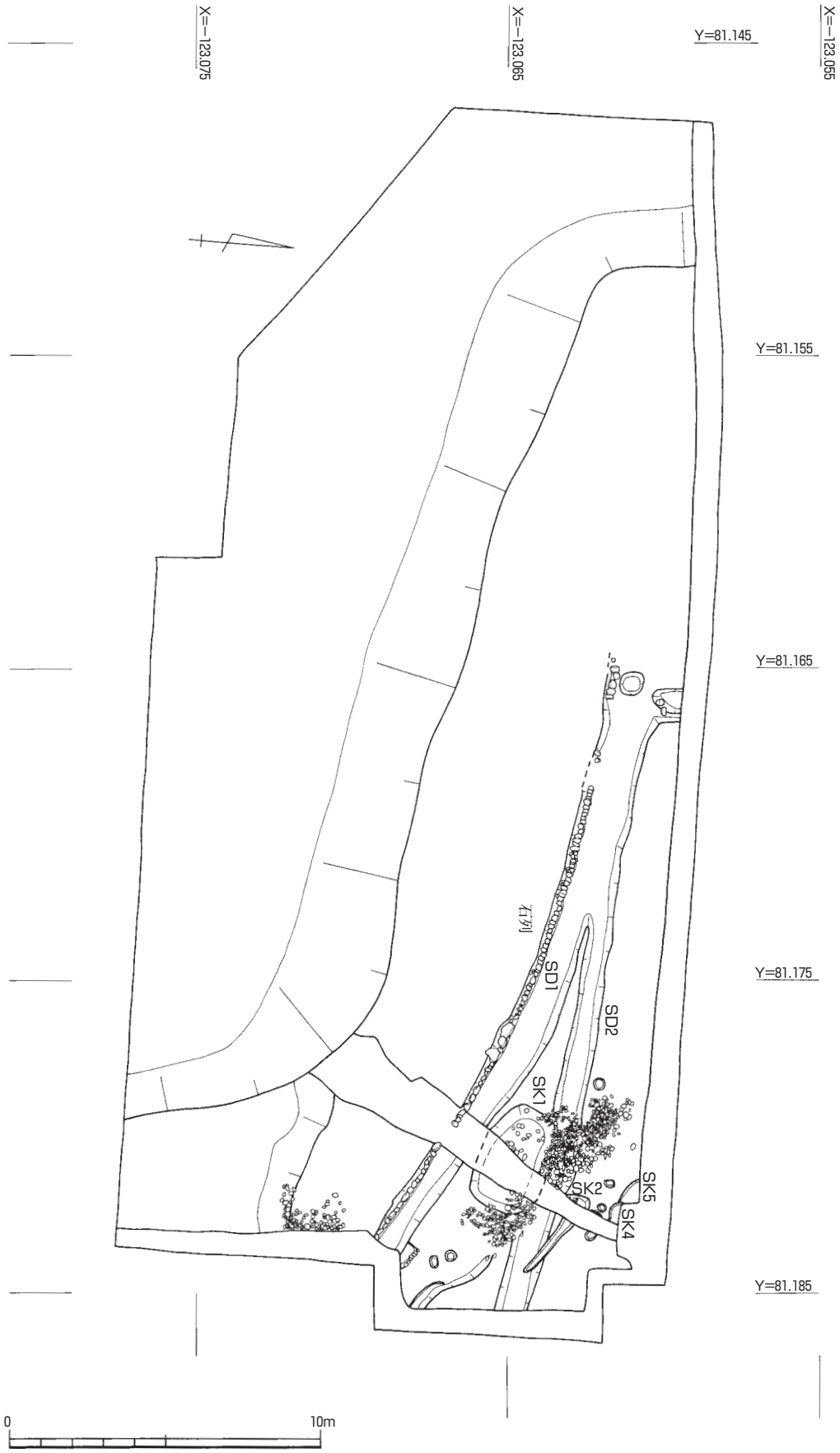
埋土は、下層は黄褐色や灰白色のシルト、シルト質極細砂～細砂、上層はにぶい黄褐色や暗褐色シルト質極細砂が堆積する。北壁土層図60層が土壌化しているため、ある時期堀の底はこの60層であったと考えられる。その後13層によって一度に埋められている。最終的に堀は６層によって完全に埋没してしまう。

須恵器椀（13）、肥前磁器椀（14）・皿（16）、三田青磁皿（17）、施釉陶器蓋（15）、丹波焼甕（18）をはじめ軒丸瓦（19・20）、軒平瓦（21～25）、丸瓦（26）、平瓦（27）が出土している。

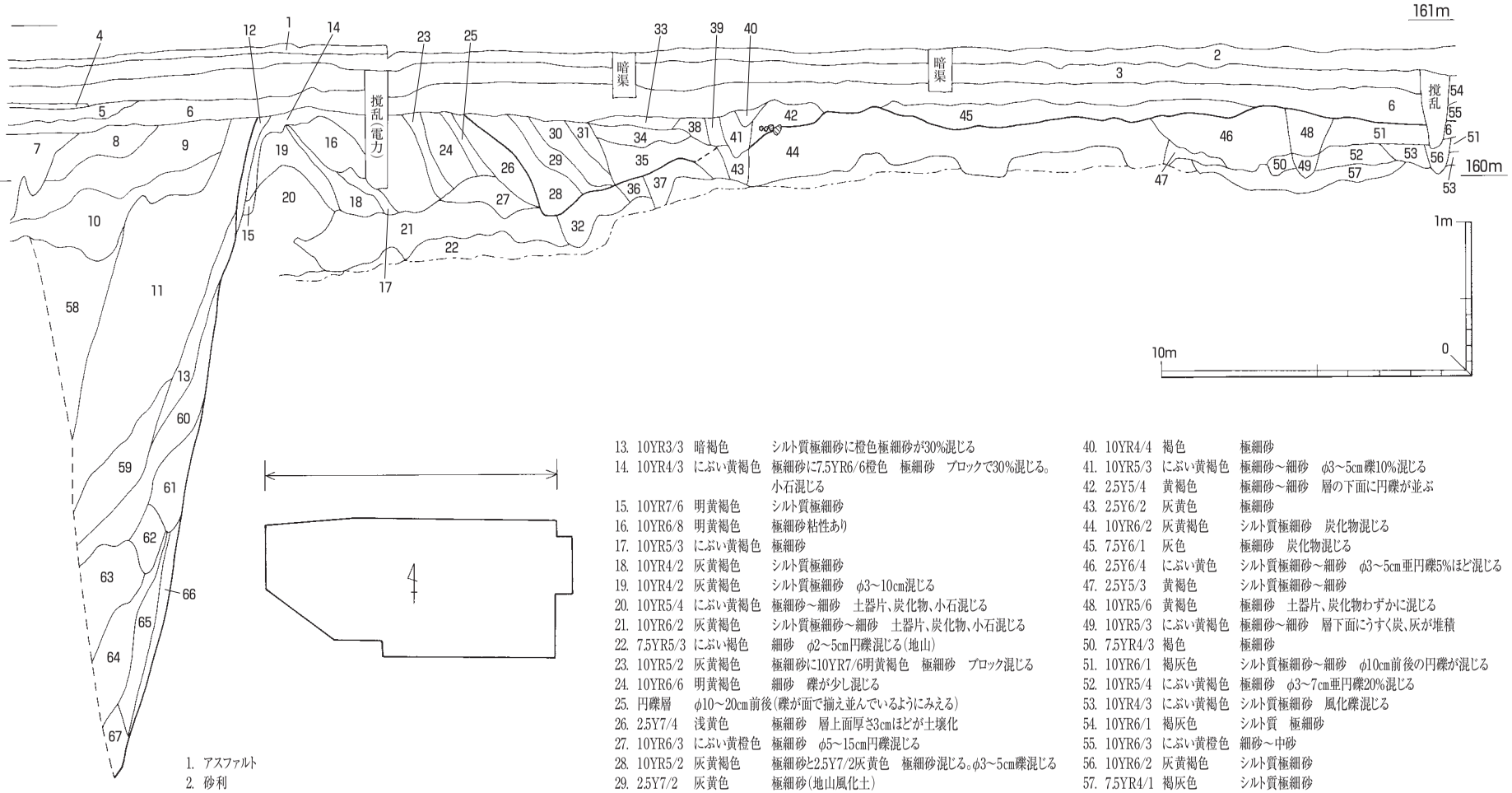
土塁（第７図、第８図　写真図版６～７）

堀の内側を廻る、幅４～５ｍの土塁を検出した。土塁の盛土は大きく２層に分かれ、下部にはシルト質細砂、上部には礫混じりの細砂を積み重ねている。下部のシルト質細砂はさらに分層でき、土が細かく積まれた様子が観察できる。土塁東部の盛土では下部に亜円礫を積む場所もあり、場所により盛土方法に変化がある。南北断面では盛土が堀にむかって緩やかに傾斜しており、堀内側から土を盛ったことが伺える。さらに、堀に面する部分は、他の部分に比べ多くの堆積層が確認でき、土塁の強化を図ったことが伺える。盛土は地山を階段状に成形した後に築かれており、その成形は部分的に２段となる。また、盛土内の極細砂上面でSD3を検出している。

土師器甕・鍋、須恵器杯・椀・鉢、中国製青磁碗・白磁椀、丹波焼擂鉢・甕、平瓦、硯が出土している。

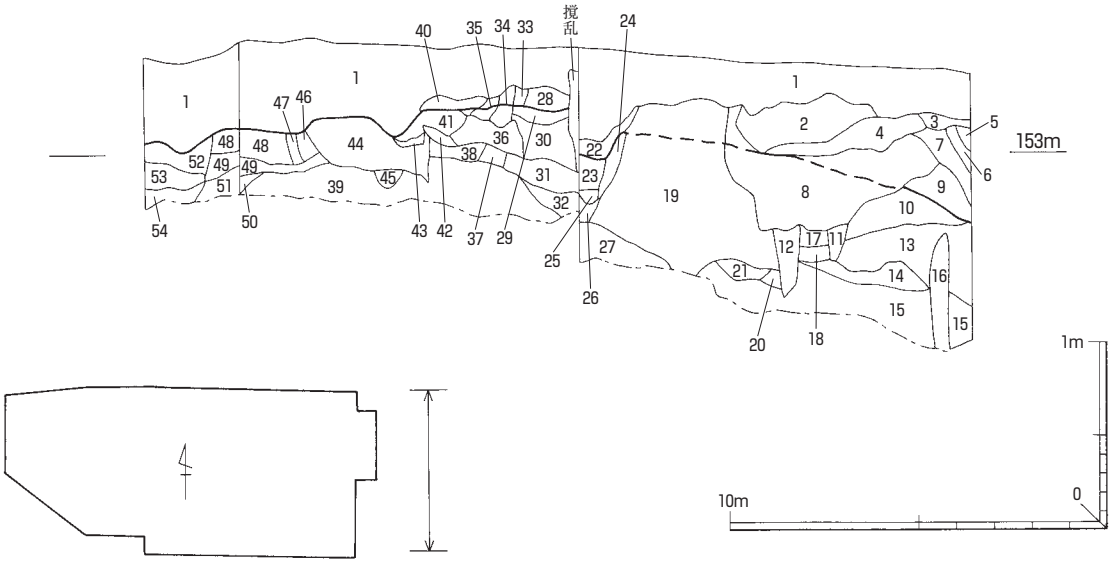


第４図　第１面上層平面図



1. アスファルト
2. 砂利
3. 盛土
4. アスファルト
5. 盛土
6. 10Y6/1　灰色　極細砂　礫混じる(整地層)
7. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂小礫混じる(空堀埋土)
8. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂　φ5～10cm円礫多く混じる(空堀埋土)
9. 7.5YR4/3　褐色　極細砂粘性あり　φ2～5cm円礫混じる(空堀埋土)
10. 7.5YR6/6　橙色　極細砂粘性あり(空堀埋土)
11. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細砂～細砂(空堀埋土)
12. 10YR3/3　暗褐色　シルト質極細砂(堀旧表土か)
13. 10YR3/3　暗褐色　シルト質極細砂に橙色極細砂が30%混じる
14. 10YR4/3　にぶい黄褐色　極細砂に7.5YR6/6橙色　極細砂　ブロックで30%混じる。小石混じる
15. 10YR7/6　明黄褐色　シルト質極細砂
16. 10YR6/8　明黄褐色　極細砂粘性あり
17. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂
18. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質極細砂
19. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質極細砂　φ3～10cm混じる
20. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細砂～細砂　土器片、炭化物、小石混じる
21. 10YR6/2　灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂　土器片、炭化物、小石混じる
22. 7.5YR5/3　にぶい褐色　細砂　φ2～5cm円礫混じる(地山)
23. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂に10YR7/6明黄褐色　極細砂　ブロック混じる
24. 10YR6/6　明黄褐色　細砂　礫が少し混じる
25. 円礫層　φ10～20cm前後(礫が面で揃え並んでいるようにみえる)
26. 2.5Y7/4　浅黄色　極細砂　層上面厚さ3cmほどが土壌化
27. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂　φ5～15cm円礫混じる
28. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂と2.5Y7/2灰黄色　極細砂混じる。φ3～5cm礫混じる
29. 2.5Y7/2　灰黄色　極細砂(地山風化土)
30. 円礫層　φ10cm前後
31. 10YR7/6　明黄褐色　極細砂～細砂　φ3cm前後礫混じる
32. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂 φ10～15cm円礫80%混じる
33. 7.5YR3/3　暗褐色　極細砂
34. 10YR6/6　明黄褐色　シルト質極細砂(混ざりもの少ない、きれいな層)
35. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細砂　φ10～15cm円礫70%混じる
36. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂
37. 7.5YR5/4　にぶい褐色　極細砂～細砂　φ3cm前後少し礫混じる
38. 円礫層　φ10～15cm
39. 10YR6/6　明黄褐色　ルト質極細砂(34層とよく似ている)
40. 10YR4/4　褐色　極細砂
41. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂　φ3～5cm礫10%混じる
42. 2.5Y5/4　黄褐色　極細砂～細砂　層の下面に円礫が並ぶ
43. 2.5Y6/2　灰黄色　極細砂
44. 10YR6/2　灰黄褐色　シルト質極細砂　炭化物混じる
45. 7.5Y6/1　灰色　極細砂　炭化物混じる
46. 2.5Y6/4　にぶい黄色　シルト質極細砂～細砂　φ3～5cm亜円礫5%ほど混じる
47. 2.5Y5/3　黄褐色　シルト質極細砂～細砂
48. 10YR5/6　黄褐色　極細砂　土器片、炭化物わずかに混じる
49. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂　層下面にうすく炭、灰が堆積
50. 7.5YR4/3　褐色　極細砂
51. 10YR6/1　褐灰色　シルト質極細砂～細砂　φ10cm前後の円礫が混じる
52. 10YR5/4　にぶい黄褐色　極細砂　φ3～7cm亜円礫20%混じる
53. 10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂　風化礫混じる
54. 10YR6/1　褐灰色　シルト質　極細砂
55. 10YR6/3　にぶい黄橙色　細砂～中砂
56. 10YR6/2　灰黄褐色　シルト質極細砂
57. 7.5YR4/1　褐灰色　シルト質極細砂
58. 10YR7/6　明黄褐色　極細砂～細砂　φ2～5cm礫混じる
59. φ5～15cmの亜円礫層
60. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂～細砂　炭化物混じる(旧表土)
61. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂～細砂　地山風化土混じる
62. 2.5Y7/3　浅黄色　シルト質極細砂～細砂　φ3～5cm礫混じる
63. 2.5Y5/4　黄褐色　シルト質極細砂～細砂
64. 10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂　φ3～5cm礫混じる
65. 2.5Y5/3　黄褐色　シルト質極細砂～細砂
66. 10YR7/1　灰白色　シルト　鉄分含む
67. 2.5GY4/1　オリーブ灰色　中砂シルト混じり

第5図　北壁土層図



1. アスファルト・礫盛土
2. 2.5Y7/4　浅黄色　細砂　φ3～5cm小石混じる
3. 2.5GY6/1　オリーブ灰　極細砂
4. 2.5Y7/3　浅黄色　極細砂～細砂
5. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂　φ20cm亜円礫・近世瓦混じる
6. 7.5YR5/2　灰褐色　シルト質極細砂
7. 2.5Y7/3　浅黄色　シルト質極細砂～細砂
8. 7.5YR6/3　にぶい褐色　極細砂～細砂　小石少し混じる
9. 2.5Y6/3　にぶい黄色　極細砂～細砂　小石少し混じる
10. 2.5Y6/4　にぶい黄色　極細砂～細砂　φ3～15cm亜円礫混じる
11. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂～細砂
12. 10YR6/2　灰黄褐色　極細砂～細砂　小石混じる
13. 2.5Y8/4　浅黄色　細砂　地山風化土混じる
14. 7.5YR4/3　褐色　シルト質極細砂　地山風化土少し混じる
15. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂
16. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂(木の根のあとか?)
17. 2.5Y6/4　にぶい黄色　極細砂～細砂　φ3～15cm亜円礫混じる
18. 2.5Y8/4　浅黄色　細砂　地山風化土混じる
19. φ10～30cm亜円礫層
20. φ3～10cm亜円礫層
21. φ3～10cm亜円礫層
22. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂　小石混じる
23. 2.5Y7/3　浅黄色　極細砂
24. 10YR7/2　にぶい黄橙色　シルト質極細砂
25. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂
26. 5Y7/4　浅黄色　極細砂　φ5cm亜円礫混じる
27. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト質極細砂　φ10～15cm亜円礫60%混じる
28. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂
29. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂　下面に炭層
30. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂　炭混じる
31. 2.5Y6/3　にぶい黄色　細砂　φ10cm亜円礫30%混じる
32. 7.5YR4/3　褐色　極細砂
33. 5Y7/2　灰白色　極細砂
34. 5Y8/3　淡黄色　シルト質極細砂
35. 10YR6/1　灰色　極細砂～細砂
36. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質極細砂
37. 10YR6/2　灰黄褐色　極細砂
38. 7.5YR6/6　橙色　極細砂～細砂
39. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂(地山)小石混じる
40. 10YR5/1　褐灰色　シルト
41. 10YR6/1　褐灰色　シルト
42. 2.5Y7/2　灰黄色　細砂
43. 2.5Y7/1　灰白色　細砂
44. 7.5YR4/1　褐灰色　極細砂　炭、灰混じる
45. 2.5Y6/2　灰黄色　極細砂
46. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂～細砂
47. 10YR6/1　褐灰色　極細砂～細砂
48. 7.5YR6/1　褐灰色　極細砂～細砂
49. 10YR6/2　灰黄褐色　極細砂～細砂
50. 2.5Y7/4　浅黄色　極細砂～細砂
51. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂～細砂　炭化物混じる
52. 北壁6層
53. 北壁51層
54. 北壁53層

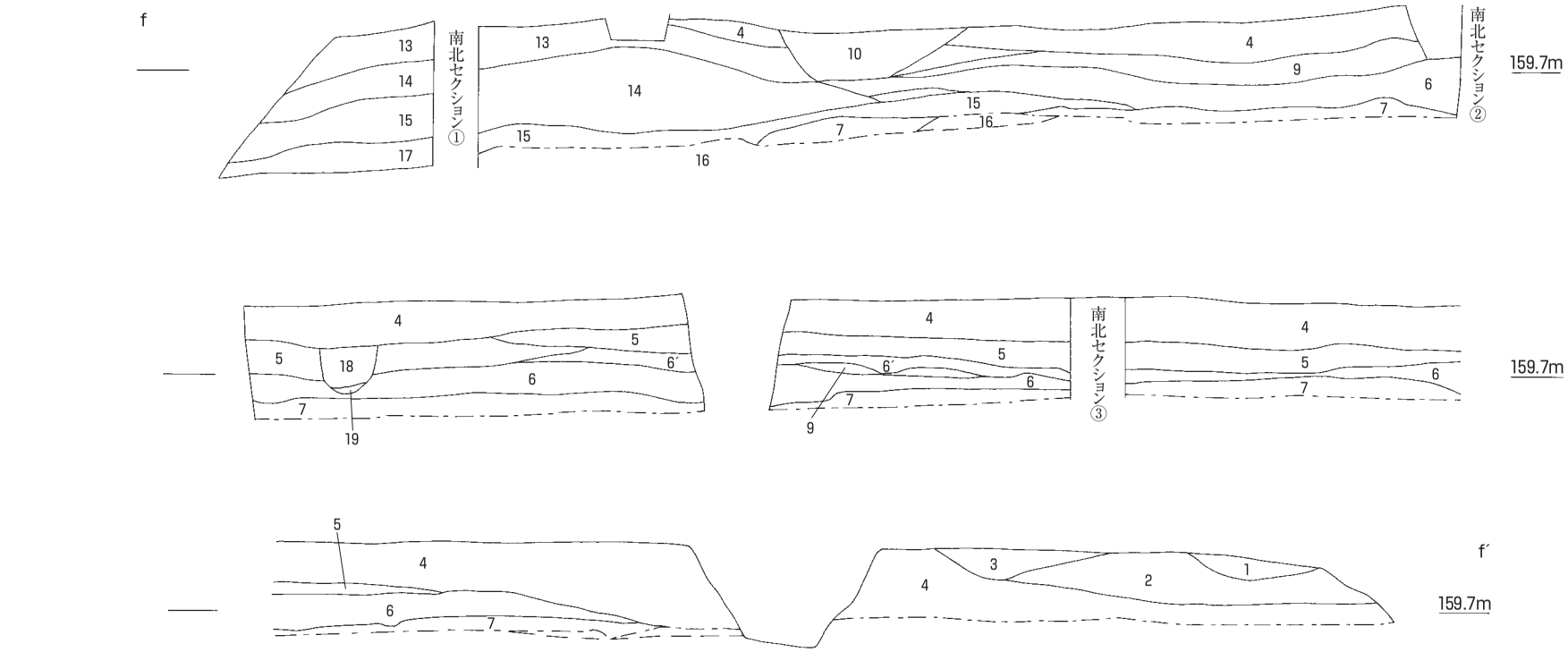
第６図　東壁土層図

石列（第９図　写真図版12）

土塁内側に位置し、東西に通る石列を検出した。石列は直径20cm前後の円礫を一列に一段並べ、土塁を縁取るように緩やかな弧を描いて配置されている。石列の途中では40cm前後の平石を３石並べる箇所がある。３石あるうちの両側２石上面に直径20cmほどの円形に変色している部分がある。形状から柱痕の可能性が考えられる。石列の背後にはSD1が平行する。

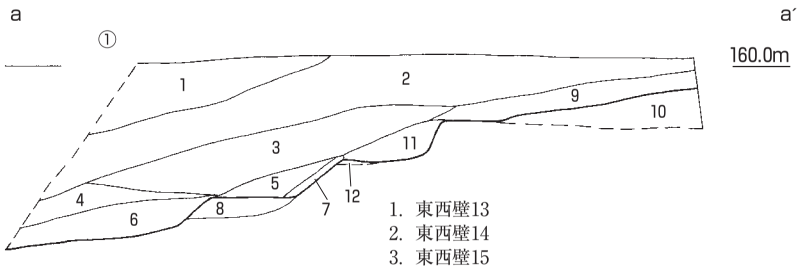
SD1（第４図　写真図版９）

石列と平行して通る。幅約1.5mの浅い溝である。途中から分岐しSD2が東へと延びる。第２面で検

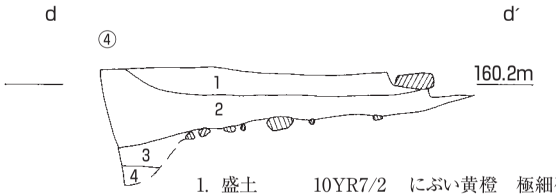


1. 10YR7/2　にぶい黄橙色　極細砂バラス多く混じる
2. φ15～20cm亜鉛礫層
3. 2.5Y6/4　にぶい黄色　極細砂～細砂
4. 2.5Y6/6　明黄褐色　シルト質極細砂φ2～10cm亜円礫混じる（シルト質層を礫層が互層になる箇所もあるため何度かに分けて土を盛っている）
5. 5Y7/6　黄色　細砂φ3～5cm亜円礫少し混じる
6. 10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト質極細砂に10YR6/8明黄褐色極細砂（地山風土）がφ2cm前後のブロックで入る
6′. 6層より地山風化土の混じりが多い（盛土時の1単位）
7. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質極細砂　やや粘性
8. 2.5Y6/4　にぶい黄色　シルト質極細砂（地山）
9. 10YR6/8　明黄褐色　極細砂（地山風化土）
10. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂～細砂
11. 10YR6/4　にぶい黄橙色　極細砂
12. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂～細砂　地山風化土が多く混じる
13. 10YR4/3　にぶい黄褐色　極細砂～細砂（7.5YR6/8橙色、2.5Y7/6明黄褐色の地山風化土が混じり合う）
14. 10YR3/1　黒褐色　シルト質極細砂～細砂　亜円礫が混じる
15. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質極細砂
16. 2.5Y5/1　黄灰色　シルト質極細砂～細砂　φ5～15cm亜円礫混じる（地山）
17. 2.5Y5/2　暗灰黄色　シルト質極細砂～細砂
18. 10YR5/3　にぶい黄褐色　極細砂φ3～5cm多く含む
19. 10YR6/1　褐灰色　シルト

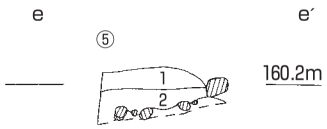
第7図　土塁盛土東西土層図



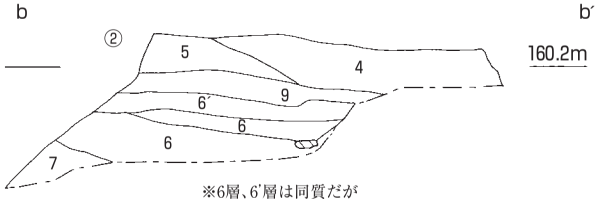
1. 東西壁13
2. 東西壁14
3. 東西壁15
4. 10 YR5/2　灰黄褐色　極細砂（φ10cm大の礫多量含む）
5. 東西壁17
6. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂（φ10cm大の礫少量含む）
7. 10YR6/2　灰黄褐色　極細砂（φ1cm大までの小礫を含む）
8. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質極細砂
9. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂（5YR5/1褐灰　極細砂の混層、φ0.7cm大の礫混じる）
10. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂（10YR7/1灰白色　極細砂　礫混じる）
11. 10YR5/2　灰黄褐色　（φ10cm大までの礫少量。7.5YR4/1褐灰　極細砂含む）
12. 7.5YR3/2　黒褐色　極細砂（表面硬化、φ0.7cm大の礫含む）



1. 盛土　10YR7/2　にぶい黄橙　極細砂
2. 東西アゼ4　礫層
3. 5PB6/1　青灰色　シルト極細砂含（盛土）
4. 5PB4/1　暗青灰色　極細砂（下層遺構）

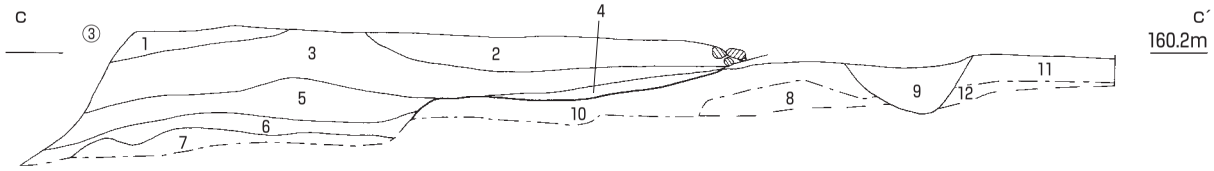


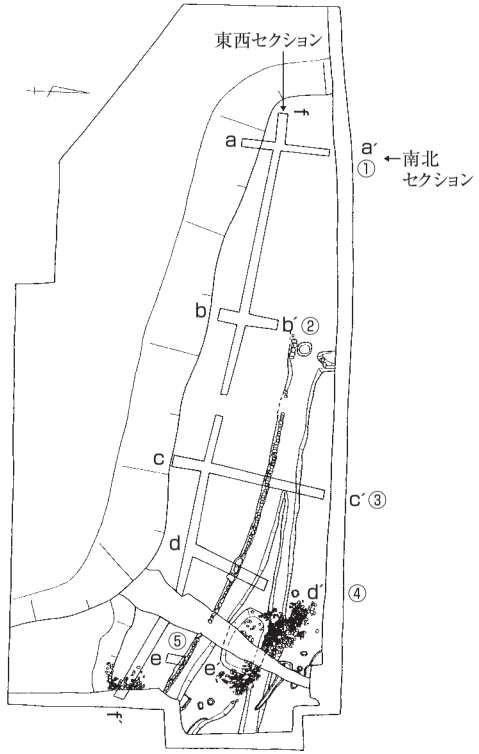
1. 2.5Y6/6　明黄褐色　シルト質極細砂
φ2〜10cm亜円礫
2. 2.5GY　オリーブ灰色　砂礫



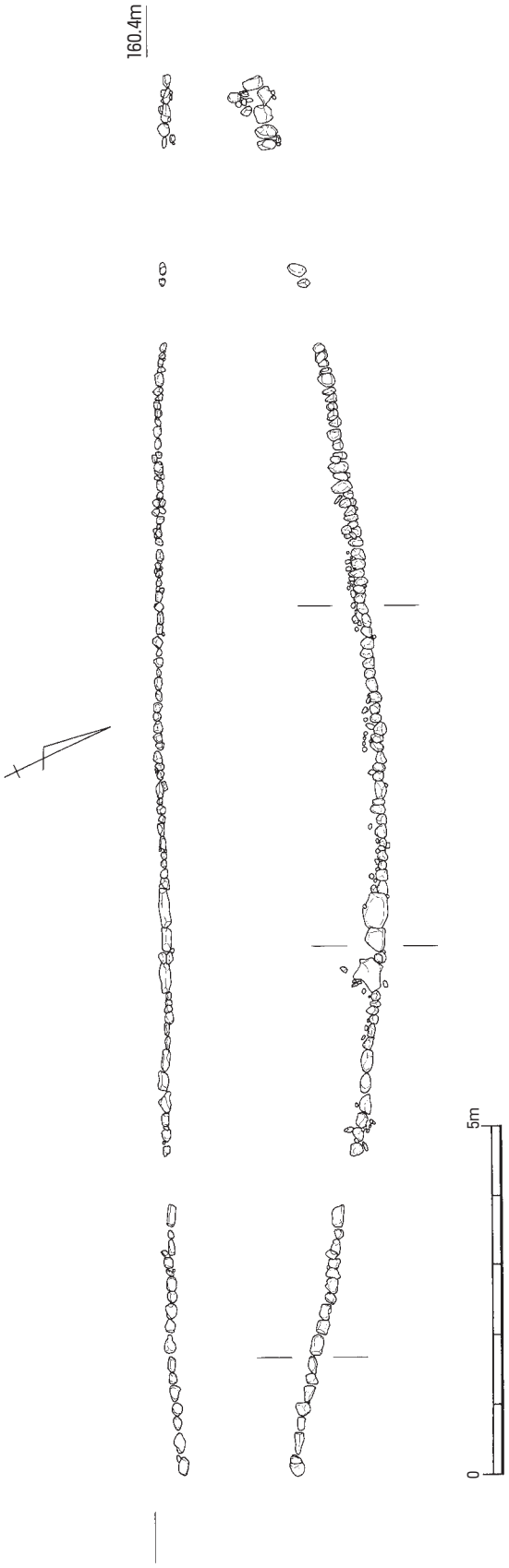
※6層、6′層は同質だが
盛土の1単位として分層できる。
（東西土層図では分層していない。）

1. 10YR8/4　浅黄橙色　シルト質極細砂
2. 2.5Y8/3　淡黄色　細砂（φ〜10cm亜円礫混じる）
3. 東西アゼ4層
4. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂
5. 東西アゼ5層
6. 東西アゼ6層
6′ 東西アゼ6′層
7. 東西アゼ7層
8. 7.5YR4/2　灰褐色　細砂　礫混じる（地山）
9. 10YR7/2　にぶい黄橙色　極細砂　中心に円礫混じる
10. 10YR6/3　にぶい黄橙色　極細砂
11. 2.5Y7/2　灰黄色　極細砂　土器片、炭化物混じる（整地層）
12. 7.5YR5/2　灰褐色　極細砂　礫混じる（地山）

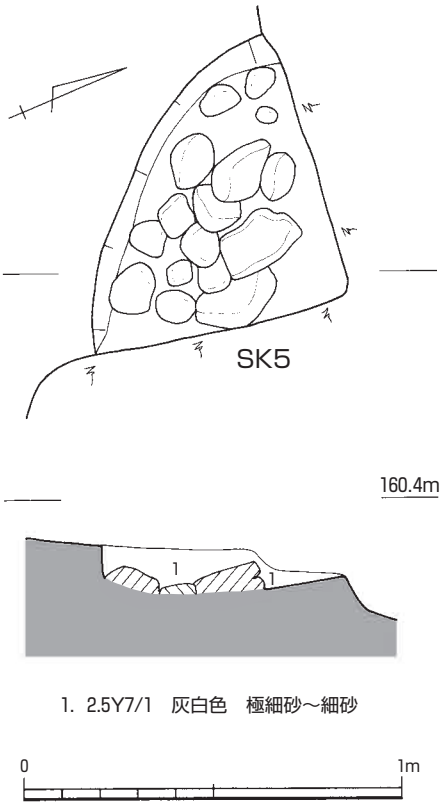




第８図　土塁盛土南北土層図



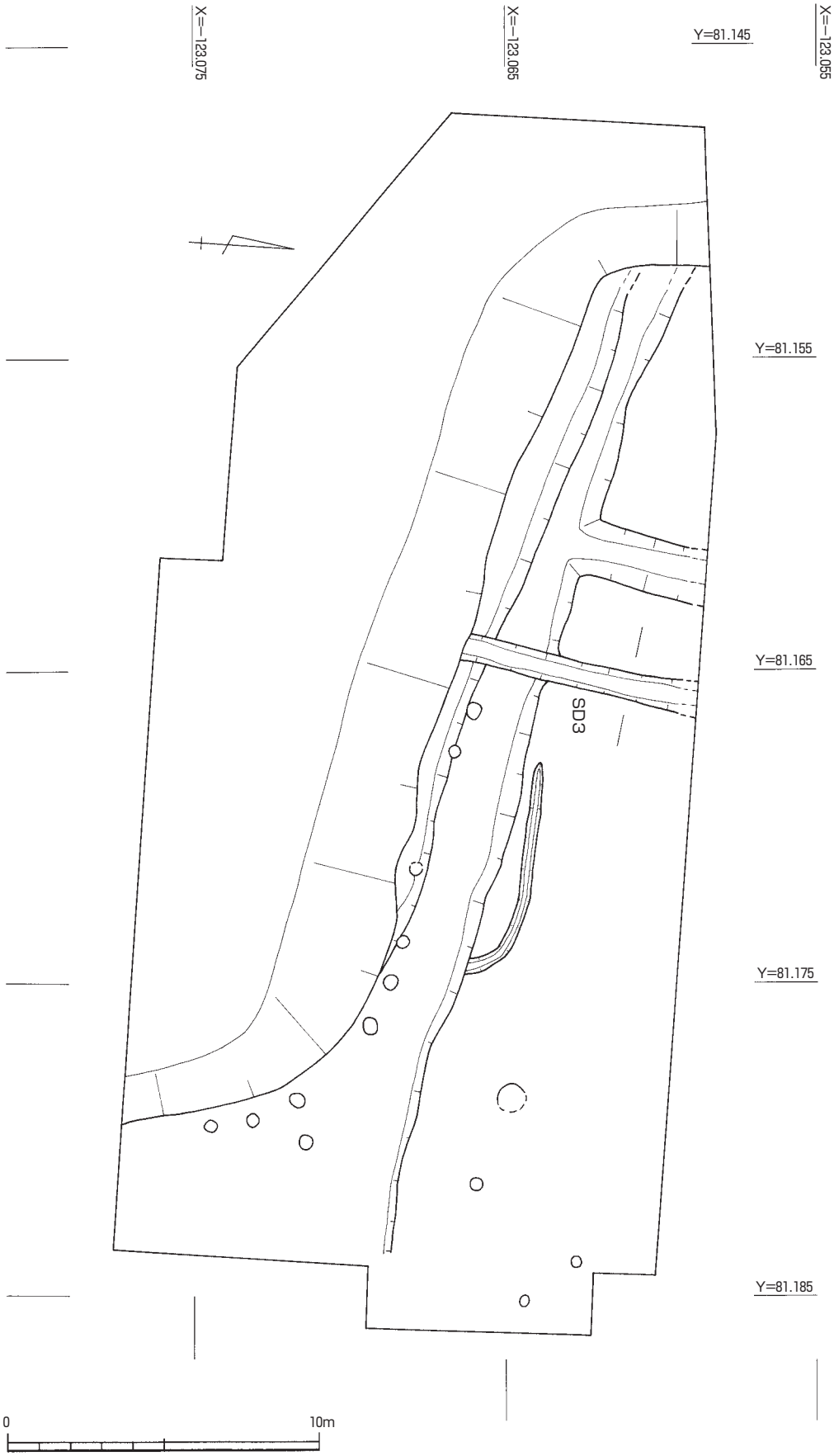
第９図　石列立・平面図



第10図　SK5

a
a´
b
b´
c
c´
d
d´
e
e´
0
2m
160.5m
160.5m
160.5m
160.5m
160.5m
1. φ2～6cm礫層
2. 10YR6/4 にぶい黄橙色 細砂
3. φ10～15cm亜円礫層
4. 2.5Y7/1 灰白色 シルト質極細砂
5. 2.5Y6/1 黄灰色 シルト
6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト 鉄分含む
7. 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト質極細砂～細砂
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～細砂
9. 10YR5/2 灰黄褐色 極細砂～細砂
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト質極細砂～細砂
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質極細砂～細砂 炭化物、土器片含む
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト
13. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト
14. 10YR5/3 にぶい黄褐色 シルト φ5～13cm亜円礫混じる
15. 10YR6/2 灰黄褐色 シルト質極細砂～細砂
16. 7.5YR6/2 灰褐色 シルト質極細砂
17. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細砂
18. 10YR7/4 にぶい黄橙色 極細砂～細砂

第11図　集石　SK1



第12図　第１面下層平面図

出したSD2下層部分（SD4、5）から判断して、SD1がSD2を切る。

須恵器蓋（4）、中国製青磁碗（5）、丹波焼擂鉢（6）が出土している。

SD2（第４図）

SD1途中から分岐する、幅約90㎝、深さ40㎝ほどの溝である。SD1から直線的に伸び、調査区東部でSK1をSD1との間に挟む。溝西部では内部に礫が入れられており、暗渠の役割を果たすと考えられる。

SK1（第11図　写真図版８）

調査区東部に位置し、SD1とSD2に挟まれる。長さ3.2㎝、深さ最大90㎝の土坑である。土坑東側は２段に掘られ、底部は水平である。

土坑周辺には最大幅2.5m、長さ７ｍの範囲に礫が敷かれている。礫は基本的に１段であり、部分的に重なる場所がある。礫範囲の東端は直線的に並ぶが、西側はSK1上でまばらとなる。土坑内の礫の堆積状況から、SK1が半分ほど埋没した状況で周辺に礫が敷き詰められたと考えられる。土師器皿（1）、須恵器椀（2）、中国製白磁（3）が出土している。

SK5（第10図　写真図版９）

調査区東部、北壁沿いに位置する。検出した幅80㎝、深さ15㎝の土坑である。土坑全体は検出していない。埋土は灰白色極細砂～細砂で、底部では円礫を検出した。

２．第１面下層

第１面上層で検出した土塁の盛土を除去した面である。調査区の北部は上層と同一面である。土塁構築痕跡、溝２条、柱穴列などを検出した。

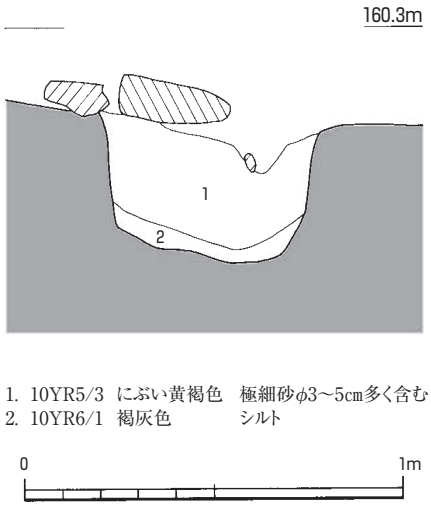
土塁構築痕跡（第12図　写真図版４）

盛土を除去した後に検出した痕跡である。東西方向の堀に沿って地山を削平し階段状の平坦面を成形する。平坦面は堀沿いでは２段であるが、調査区南東部で検出した張り出し部分では１段となる。南北方向の堀に対する成形は確認されなかった。

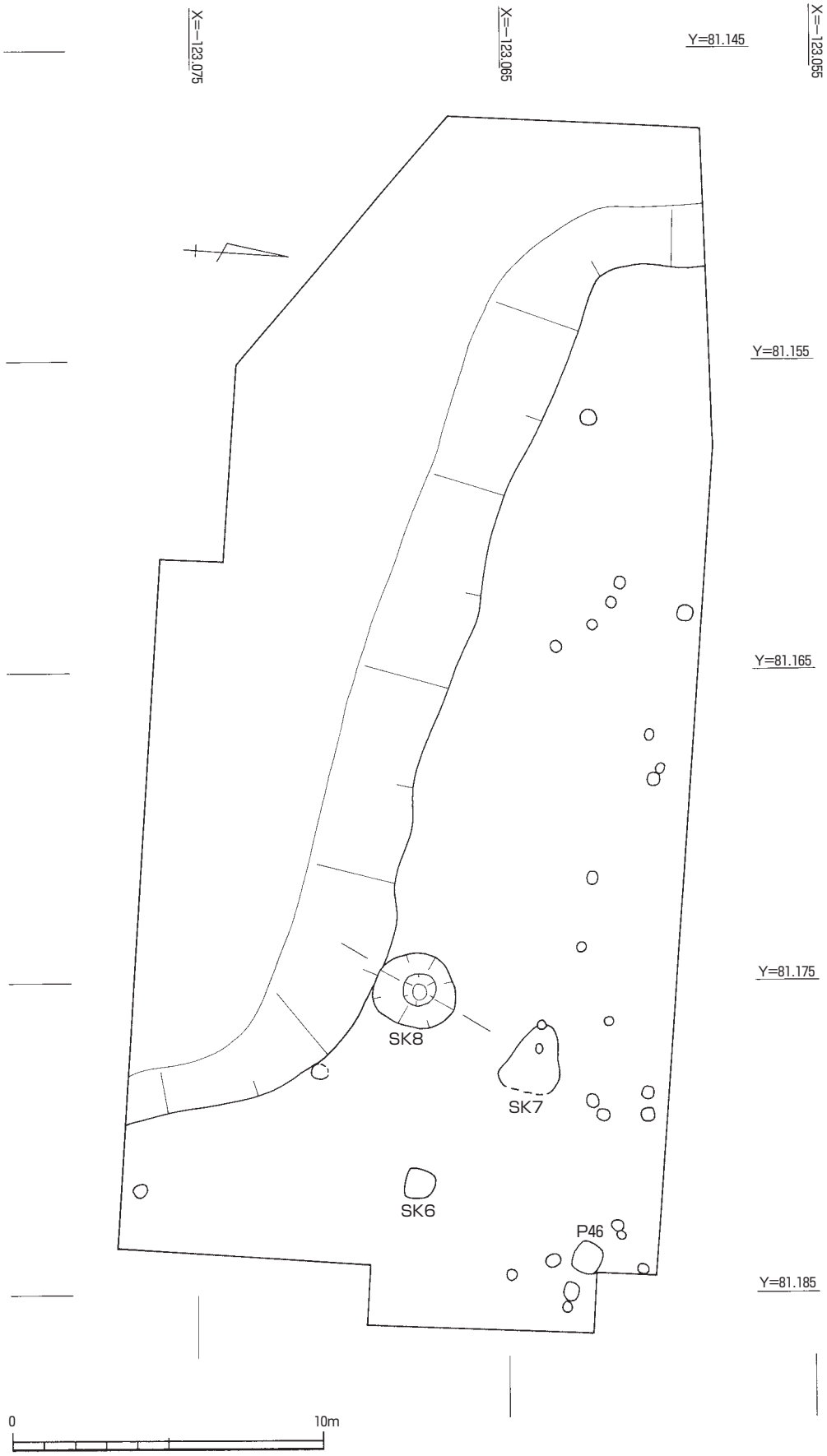
SD3（第13図　写真図版10）

調査区北部から盛土内を通り、堀へと続く溝である。幅50～70㎝、深さ40㎝ほどの箱堀の溝で内部に円礫が入れられている。埋土は溝底部にはシルト、上部に極細砂が堆積する。溝の形状から排水用の暗渠であると考えられる。検出状況から、土塁構築時に設置された溝と考えられる。

土師器皿（7）、須恵器蓋（8）・椀（9）、土師器鍋（10）、丹波焼擂鉢（11）、丸瓦（12）が出土している。



第13図　SD3


X=−123.075
X=−123.065
X=−123.055
Y=81.145
Y=81.155
Y=81.165
Y=81.175
Y=81.185
SK8
SK7
SK6
P46
0
10m

第14図　第２面平面図

柱穴列（第12図）

堀の肩に沿って連続する直径40cm前後の柱穴を９個検出した。土塁盛土直下の地山上であるため、土塁構築時に掘られた柱穴である可能性が高い。

３．第２面

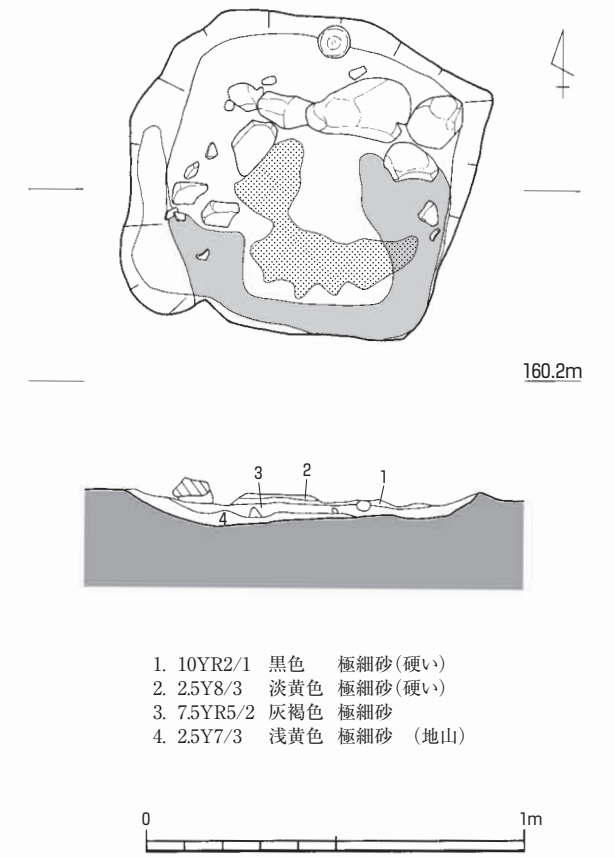
調査区北側の整地層を除去し、地山上で検出した面である。溝２条、土坑３基、柱穴を検出した。

SD4、5（第４図　写真図版11）

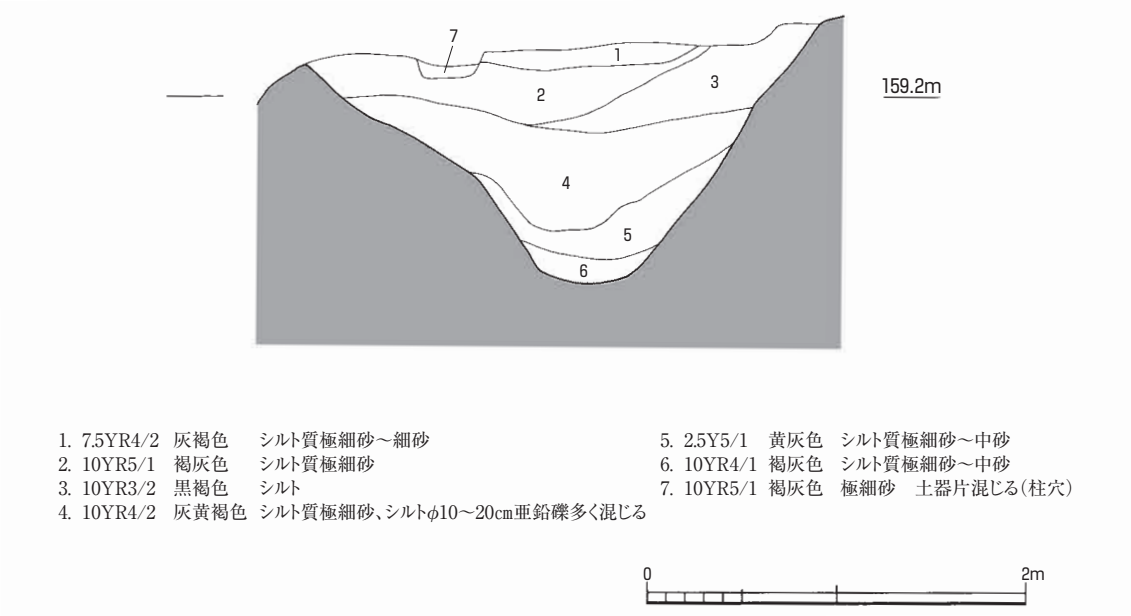
第１面上層で検出したSD2の下層部分である。基本的に上層の遺構のため、第２面平面図には図示していない。SD2として上層での検出時は、SD2はSD1と分岐している。しかし、第２面まで掘り下げるとSD2は１本の直線的な溝であった。

SK6（第15図　写真図版13）

調査区東部SK8の東側に位置する。検出した一辺約90cm、深さ最大20cmの方形の土坑である。土坑中央北より部分に20～30cm大の亜円礫が、「コ」字形に並べられている。並べられた石の開口部分は南側を向いている。この石囲いから南側の地山面は



第15図　SK6



第16図　SK8

被熱しており、石囲い南側に円弧上に黄変硬化する箇所と、土坑南側で「コ」字形に赤変硬化する部分がある。埋土には大量の炭や灰を含んでおり、極わずかではあるが骨片が混じっている。このことから、この土坑は火葬場であったと考えられる。土坑の北壁中央部分には、土師器皿（59）が置かれていた。

SK7（第14図）

調査区東部SK8の北側で検出した。直径２ｍの落ち込みに茶褐色粘質土が堆積した土坑である。埋土は自然堆積である。

弥生土器壺（60）・高杯（61）をはじめ壺・甕の底部破片が出土している。

SK8（第16図）

調査区東部SK7の南側に位置する。検出した長軸３ｍ、短軸2.3m、深さ1.2mの土坑である。土坑は途中で段を持ち、中心の掘形は円形となる。埋土は途中まで自然に堆積したものであるが、上部は人工的に埋め戻されている。

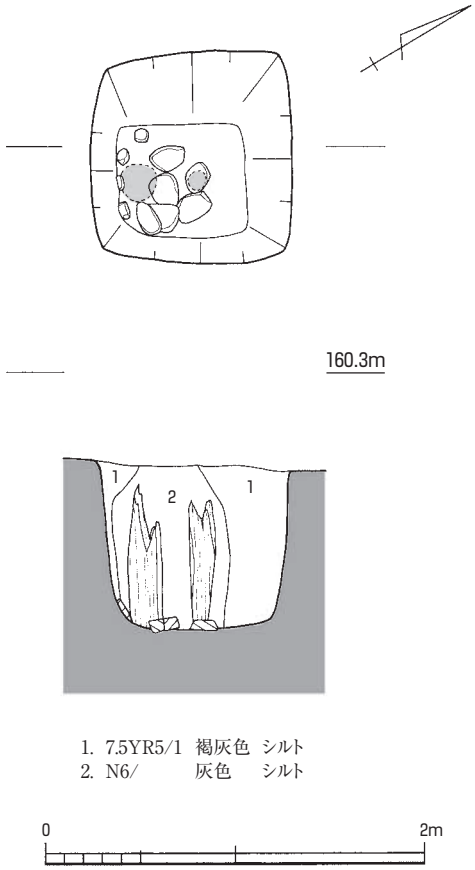
須恵器杯Ａ（66・67）・杯Ｂ（68・70・71）とヘラで記号を刻んだ須恵器片（69）が出土している。

P22（第14図　写真図版14）

調査区北東部に位置する。検出した直径50㎝、深さ50㎝の円形の柱穴である。

P46（第17図　写真図版14）

調査区北東部に位置する。検出した１辺90㎝、深さ約90㎝の方形の柱穴である。柱穴内には、柱が２本遺存しており、それぞれ10㎝角、15㎝角の角材である。柱の周りには石が置かれている。柱材と思われる W1と建築部材片W2が出土している。



第17図　P46

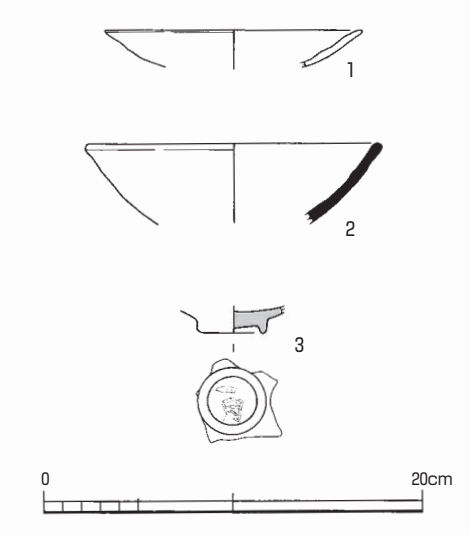
第２節　遺物

三田城跡の本発掘調査で出土した遺物の量は、土器がコンテナに換算して８箱、金属製品が２点、石製品が２点、木製品が２点である。その内訳は、弥生土器高杯・壺・甕、須恵器杯・椀・捏鉢、土師器皿・鍋、丹波焼甕・擂鉢、瓦、三田焼青磁皿、中国製陶磁器碗等が出土している。金属製品は中国銭を含む銅銭があり、石製品は硯と弥生時代と考えられる台石がある。木製品は柱材等が出土している。遺物は土塁、堀、土坑、溝等の遺構や包含層より出土している。以下、出土遺物について遺構内出土遺物を中心に概観する。

１．遺構出土の遺物

SK1（第18図、写真図版15）

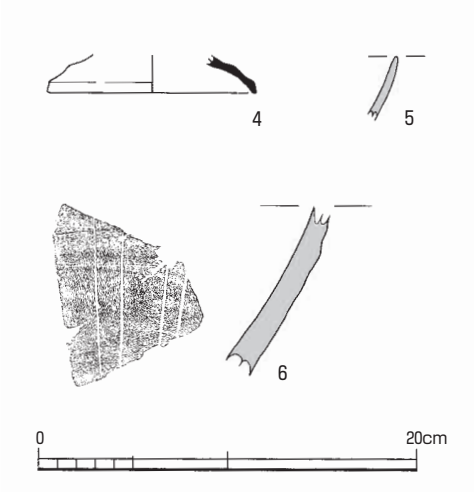
土師器皿（1）、須恵器椀（2）、中国製白磁碗（3）が出土している。１の土師器皿は京都系土師器Ｉタイプの範疇と理解でき、16世紀代の所産と考えられる。２の須恵器椀は口縁端部を丸くおさめた作りで、東播系須恵器の編年を参考にすると、13世紀前半の特徴をもつ。３の白磁碗は高台内に墨書「一□」が認められる。不明部分は「月」とも読めるが、上書きされており確定できない。



第18図　SK1出土土器

SD1（第19図、写真図版15）

須恵器蓋（4）、中国製青磁碗（5）、丹波焼擂鉢（6）が出土している。４の須恵器蓋は歪があり確定できないが、おおよそ８世紀前半のものと考えられる。５は龍泉窯系の青磁碗である。外面に鎬蓮弁文をもち、13世紀前半に比定される。６は１回１条描きの擂り目をもつ丹波焼の擂鉢である。



第19図　SD1出土土器

SD3（第20図、写真図版15、16）

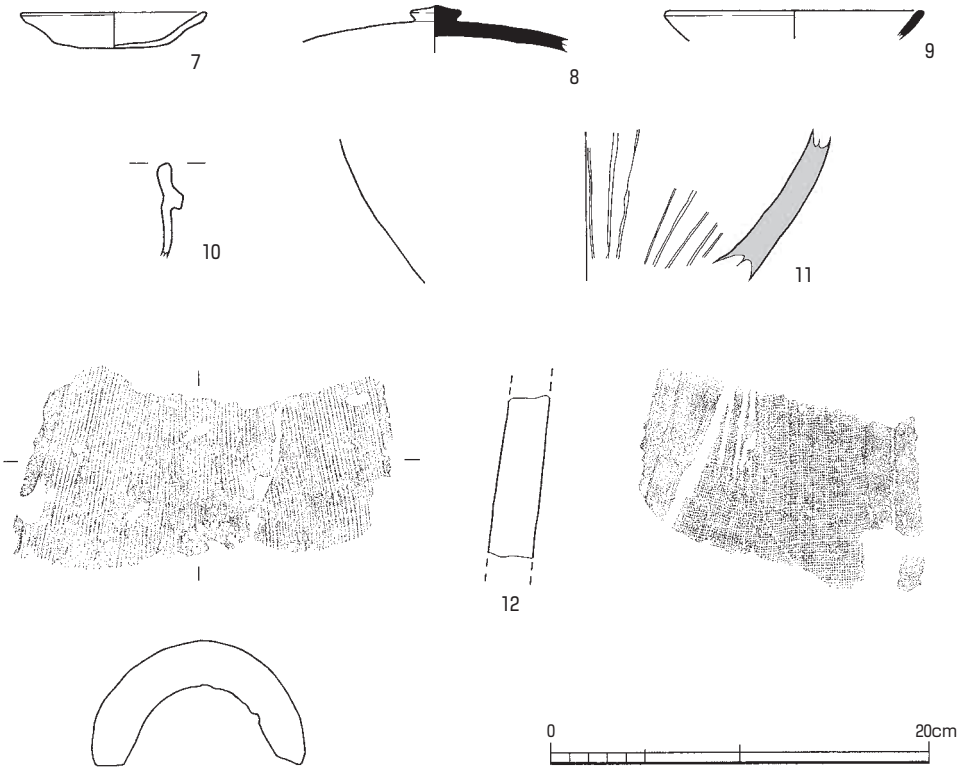
土師器皿（7）、須恵器蓋（8）・椀（9）、土師器鍋（10）、丹波焼擂鉢（11）、丸瓦（12）が出土している。

７の土師器皿は内面にナデ上げ技法が施された白色系の皿で、京都系土師器の範疇と理解したい。時期はナデ上げ技法が盛行する15世紀以降のものと考えられる。

11は丹波焼擂鉢である。内面には１回１条描きの擂り目を施す。12の丸瓦は凸面がハケ調整、凹面には７本／１㎝の布目を残す。

SD4（第21図、写真図版16）

台石（S1）と考えられる。正面と右側面に擦り跡を残す。



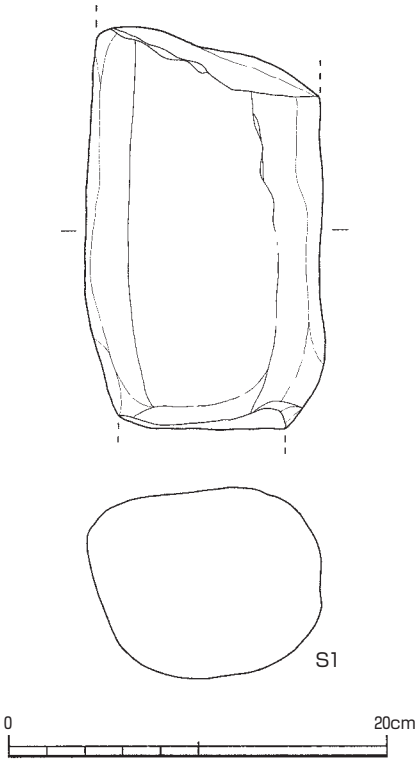
第20図　SD3出土土器・瓦

堀（第22図～第25図、写真図版16～19）

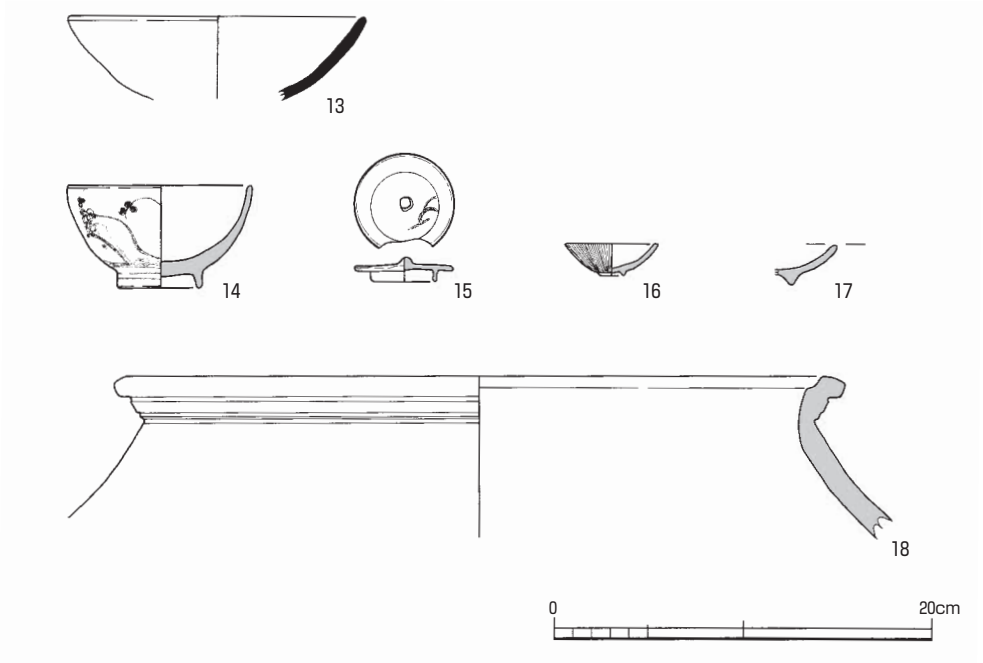
須恵器椀（13）、肥前磁器碗（14）・皿（16）、三田青磁皿（17）、施釉陶器蓋（15）、丹波焼甕（18）をはじめ軒丸瓦（19･20）、軒平瓦（21～25）、丸瓦（26）、平瓦（27）が出土している。

13の須恵器椀は口縁端部を丸くおさめ、底径が小さく作っており、東播系須恵器の編年を参考にすれば12世紀後半～13世紀の特徴をもつ。14の肥前焼染付碗は、高台端部が無釉の丸碗である。肥前陶磁器編年のⅣ期の範疇に納まり、17世紀末～18世紀代の所産と考えられる。15は小壺の蓋である。表面には鉄絵が描かれる。時期は19世紀前半と考えられる。16の白磁紅皿は肥前陶磁器編年のⅤ期の範疇と理解でき、19世紀初頭に比定される。17は地元三田焼の青磁皿である。内面には花文が施される。19世紀前半に比定される。18は丹波焼の甕である。中世丹波焼窯の稲荷山窯より同形の甕が確認されている。丹波焼きの窯跡を中心とした編年を参考にすれば、14世紀後半～15世紀後半に比定される。

軒丸瓦（19･20）は、瓦当面に巴文を配する瓦である。



第21図　SD4出土石製品



第22図　堀内出土土器

19は巴文の頭が若干尖っており、尾は1/2回転以下と短い。胎土に長石粒を多く含み、軟質の仕上がりになっている。20の巴文は頭が丸味を帯びるが括れはない。尾は1/2回転以上と長い。瓦当面には離れ砂が残る。凸面はナデ調整、凹面にはコビキＡの粘土板切断方法が採用され、吊紐痕も確認される。胴部には釘穴が穿たれている。

軒平瓦（21～25）は、中心飾りに宝華ないしは立花を施す21・22・25と天正10年（1582）に入城した山崎氏の家紋である扇文を中心飾りにもつ24がある。これ以外に丸瓦(26)、平瓦(27)がある。丸瓦(26)は凹面にＥタイプの吊紐痕、コビキＡ技法、工具側面による叩きが確認できる。これらの特徴から16世紀以降のものと理解できる。

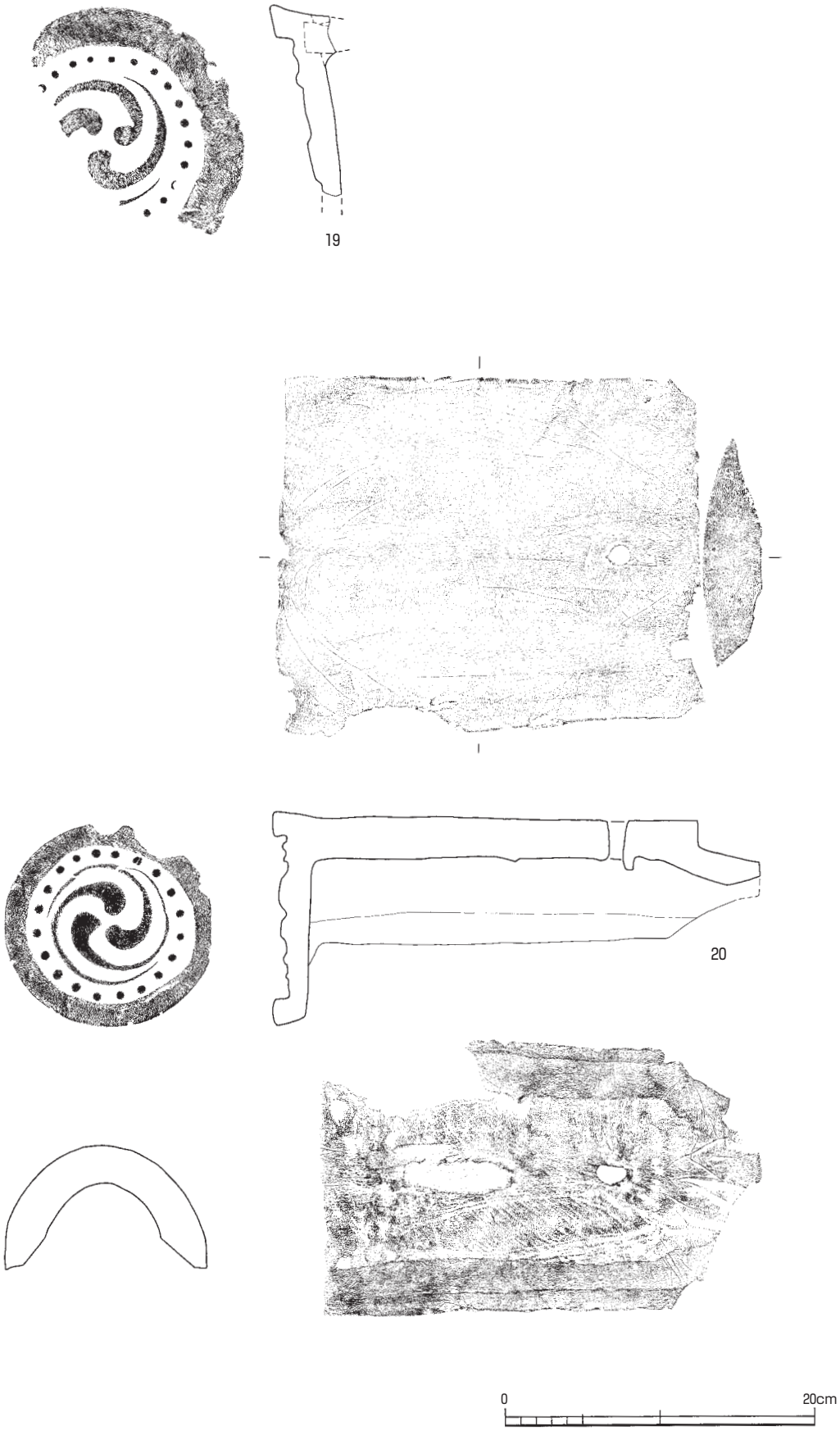
土　塁（第26図～第29図、写真図版20～22）

土師器甕・鍋、須恵器杯・椀・鉢、中国製青磁碗・白磁椀、丹波焼擂鉢・甕、平瓦、硯が出土している。

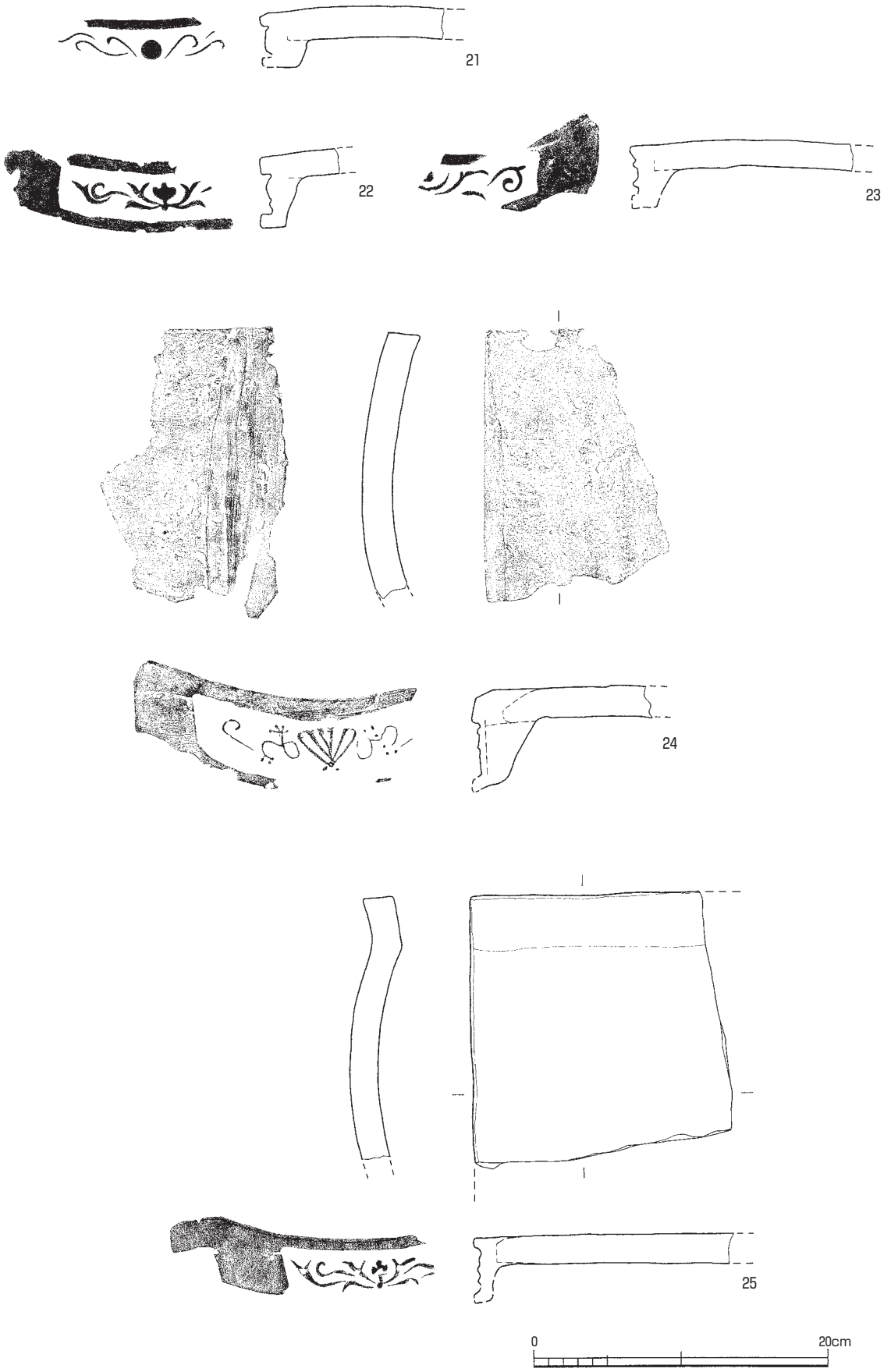
28の甕は摩滅が著しく、弥生土器か土師器の判別が難しいが、ここでは土師器甕として報告する。平安時代後期の範疇におさまると考えている。

29～35は外面にタタキを施す丹波・播磨を中心に出土する鍋である。神戸市兵庫津遺跡の出土事例を参考にすれば、29は鍋形タイプのうちでも鉄かぶと形（長谷川2004）に分類されるもので、15世紀中頃に比定されている。30～35は甕形タイプに分類される一群で、30・31が14世紀後半、32が15世紀前～中頃、34が14世紀前半に比定される。土塁盛土内より出土した土師器鍋は遺存状況が良好な一群で、その時期は14世紀前半～15世紀中頃に集中する。

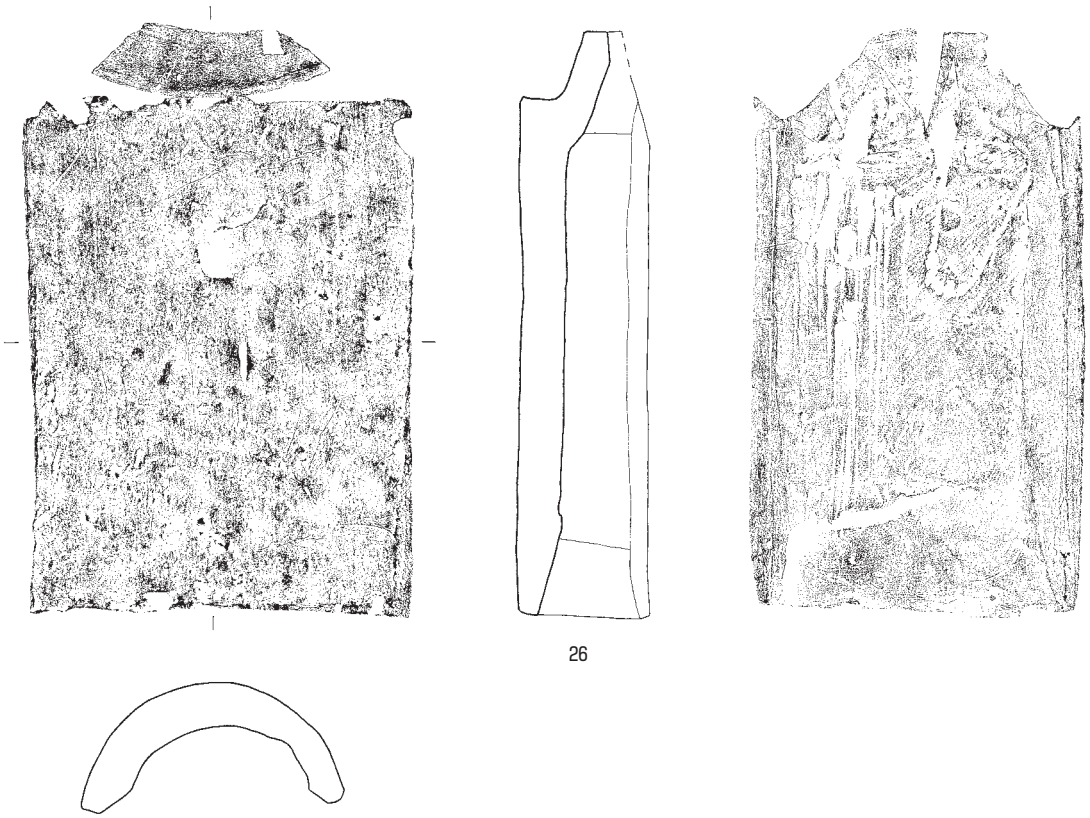
36～47は須恵器の一群である。36は７世紀後半の特徴をもつ杯蓋である。37の杯身は６世紀中頃に比定できる。38・39の杯Ａ、40・41の杯Ｂはおおよそ８世紀前半におさまると考えられる。43～46の椀は、口縁部ないしは底部破片のため時期の同定に正確さを欠くが、43・44・46の椀は口縁部の状況、内面底部に段差が認められるなどの点から11世紀後半代と理解したい。内面底部に段差をもたない45は12世紀前半代と考えられる。47の口縁部が肥厚し、直立する捏鉢は13世紀代であろうか。

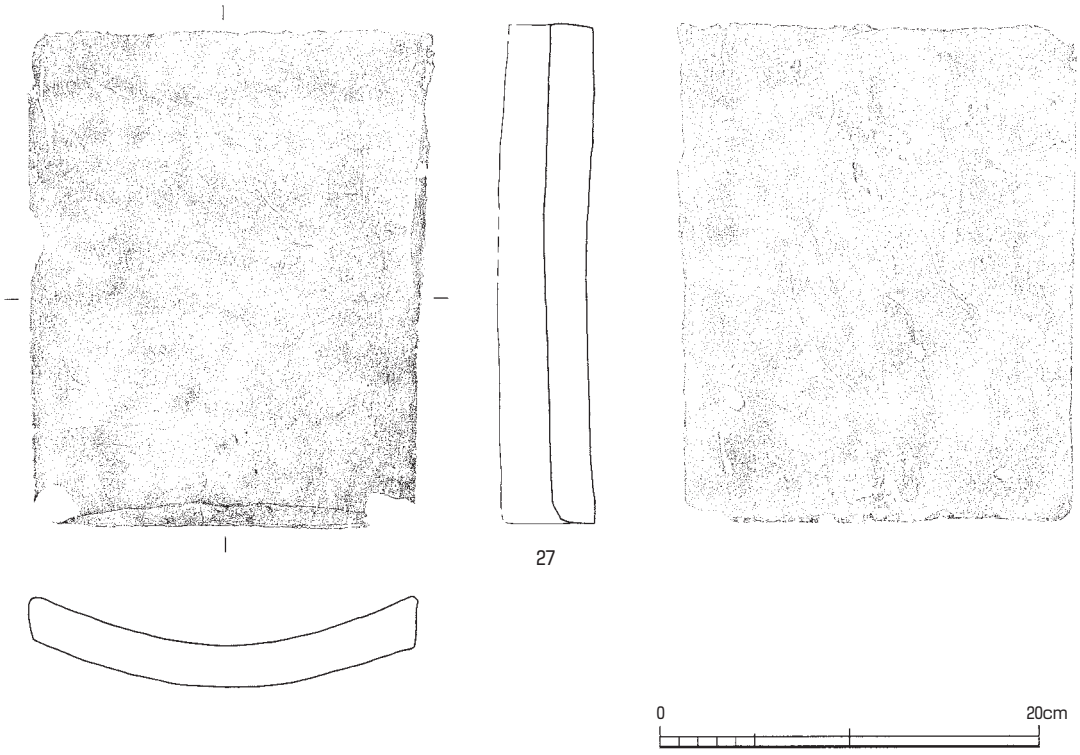


第23図　堀内出土軒丸瓦

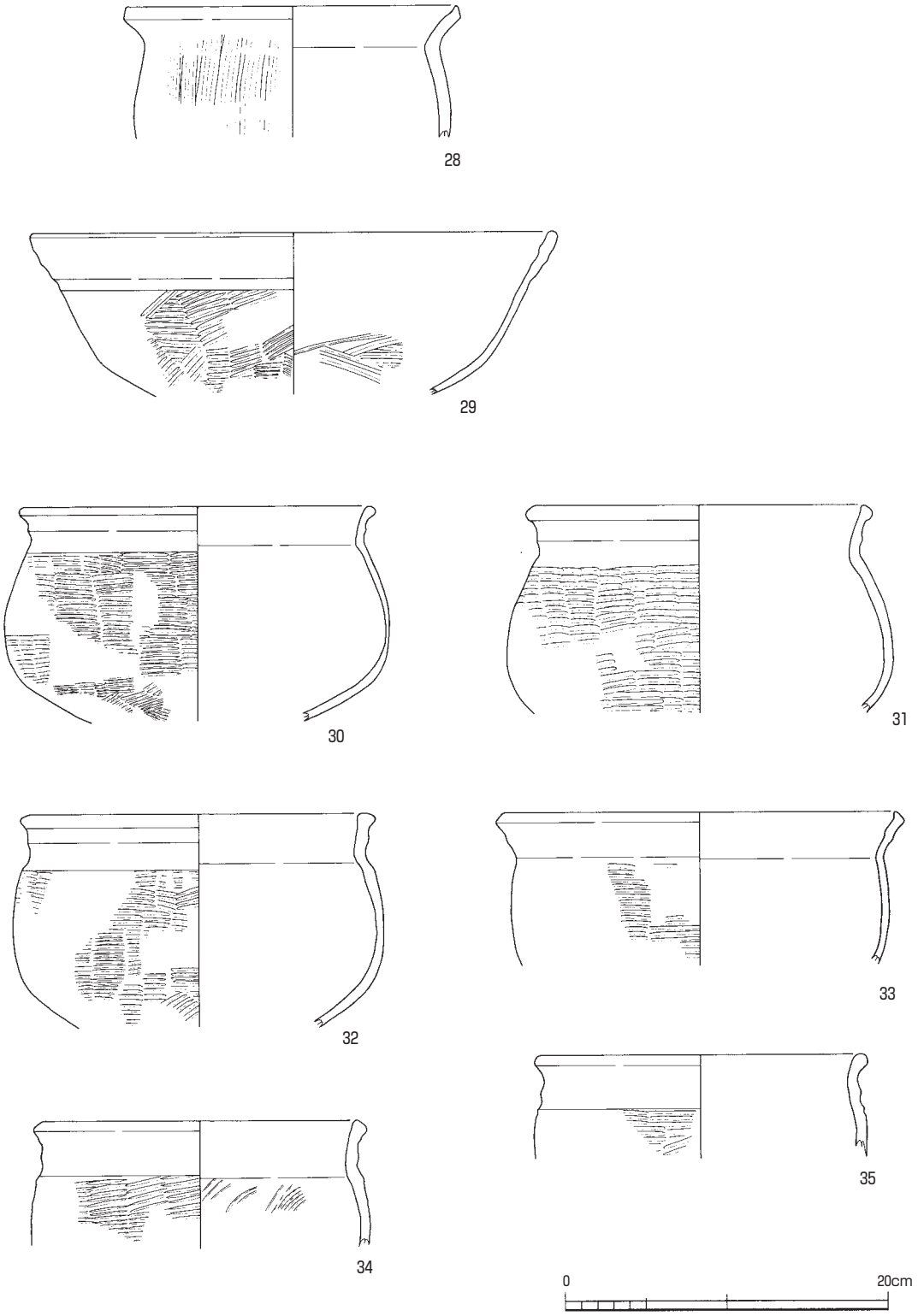


第24図　堀内出土軒平瓦

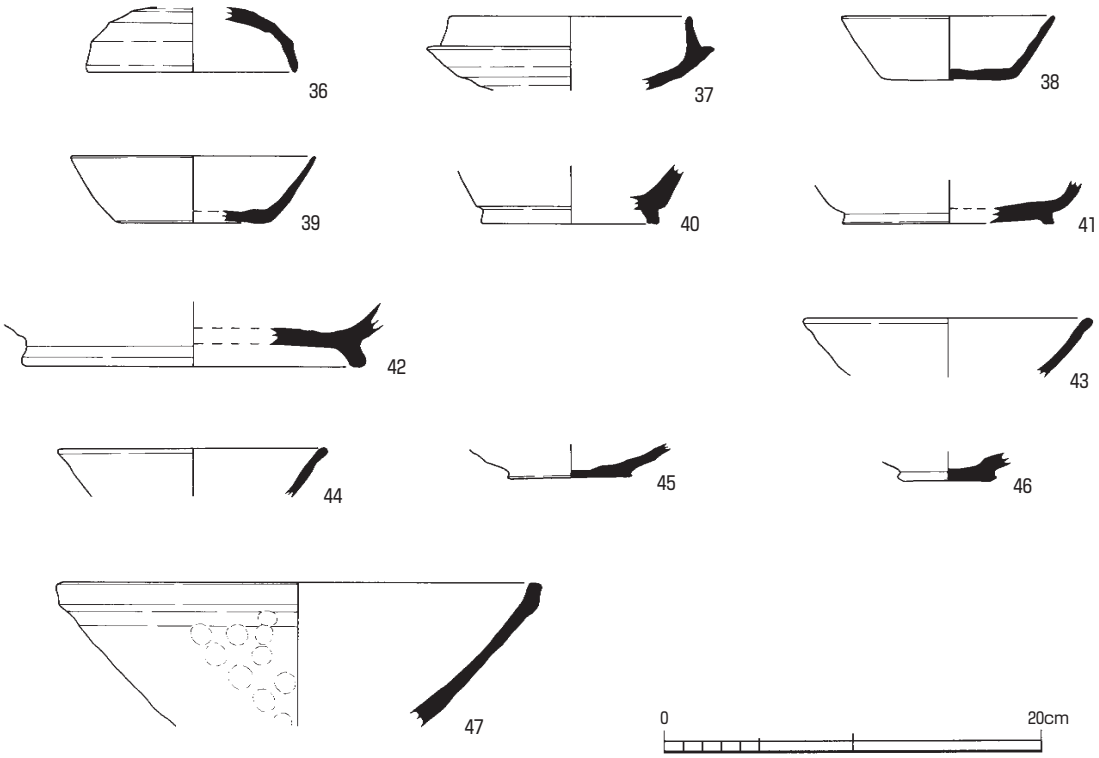




第25図　堀内出土丸瓦・平瓦



第26図　土墨内出土土器(1)



第27図　土塁内出土土器(2)

48の内外面無文の端反青磁碗は15世紀後葉～16世紀前葉に比定でき、49の白磁椀Ⅳ類の碗は、11世紀後半～12世紀前半に比定できる。

50～56は丹波焼の擂鉢と甕である。50の口縁部が短く直立する擂鉢は、中世丹波焼窯である稲荷山窯の採集品に近似するものがあり、14世紀後半～15世紀後半と理解したい。また口縁部に強いヨコナデを施し、端部を丸くおさめた52は三田市中尾城跡より近似した擂鉢が出土し、16世紀後半に比定されている。53の玉縁状の口縁をもつ片口鉢は、中世丹波焼窯である源兵衛山窯より近似した片口鉢が出土しており、13世紀後半～14世紀前半と理解したい。54・56の甕は稲荷山窯より出土事例があり、14世紀後半～15世紀後半と考えておきたい。55の甕は近世の所産である。土塁盛土内より出土した丹波焼は、おおむね13世紀後半～16世紀後半の中世段階のものが主体である。近世に帰属する55の甕は、混入品の可能性をもつ。

57・58は平瓦の破片である、いずれも須恵質の焼き上がりである。いずれも凸面の調整はナデ調整であるが、凹面は57が布目、58は離れ砂の痕跡を残す。

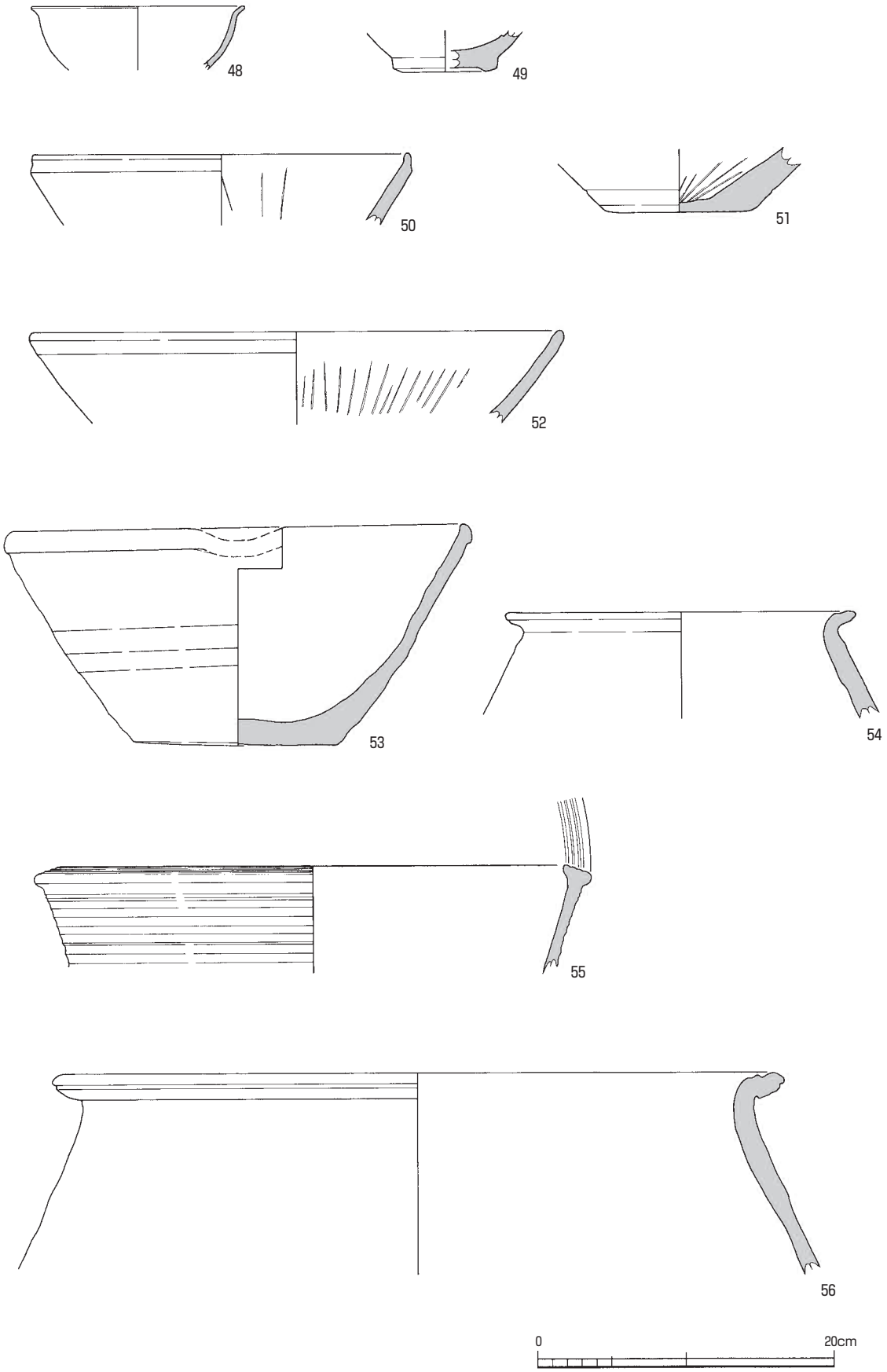
Ｓ２は長さ9.5㎝、幅4.6㎝、厚さ1.25㎝の小型の硯である。携帯用であろうか。材質は不明である。

SK6（第30図、写真図版23）

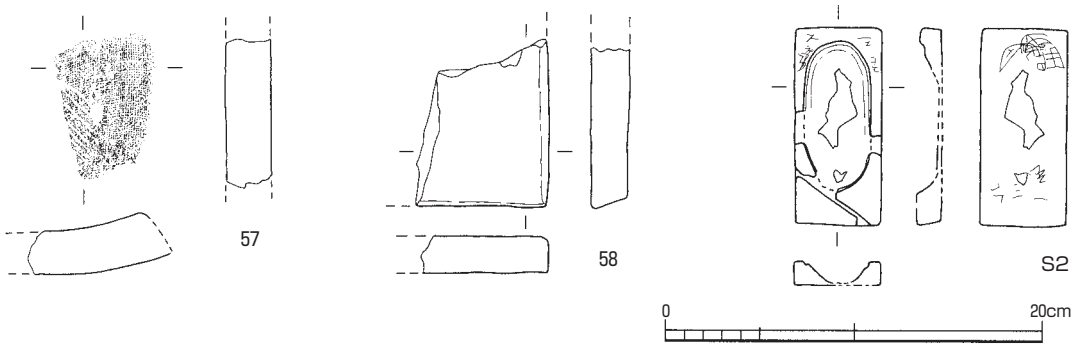
土師器皿（59）が出土している。いわゆるへそ皿で、京都系土師器皿の範疇で捉えられる。淡褐色の焼き上がりである。

SK7（第31図、写真図版23）

弥生土器壺（60）・高杯（61）をはじめ壺・甕の底部破片が出土している。60は頸部に押圧凸帯文を施した壺である。中期後半に比定される。61は口縁部破片である。端部が垂下し、面をもつ中期後半の



第28図　土墨内出土土器(3)

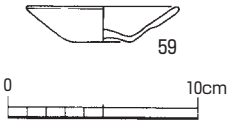


第29図　土塁内出土瓦・硯

高杯である。62と65は壺の底部破片である。63・64は甕の底部である。

SK8（第32図、写真図版23）

須恵器杯A（66・67）・杯B（68・70・71）とヘラで記号を刻んだ69が出土している。底部ヘラ切りの杯Aのうち、66は軟質の仕上がりになっている。杯Bのうち71は内面底部周縁に指押さえが顕著に見られる。69は器種は不明であるが、胴部に「十」のヘラ記号が施される。須恵器杯の一群は８世紀後半の特徴をもつ。71の杯Bはこれらより新しい要素がみられるが、他と同様の時期におさまると考えたい。



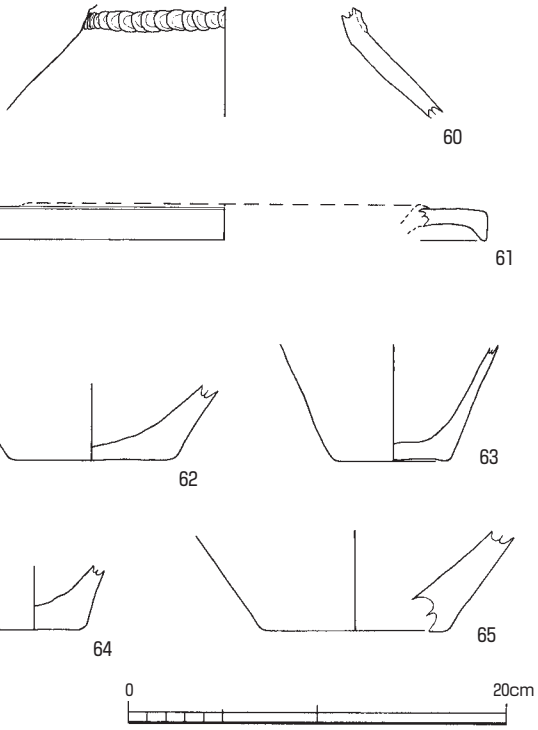
第30図　SK6出土土器

P41（第33図、写真図版24）

凸面に格子タタキをもつ平瓦（72）が出土している。

P46（第34図、写真図版24）

柱材と思われるW1と建築部材片W2が出土している。



第31図　SK7出土土器

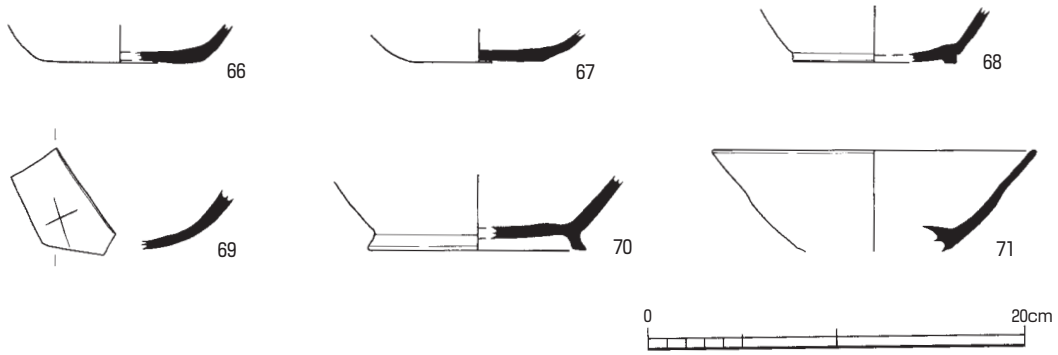
2　包含層出土の遺物

（第35・36図、写真図版20・24・25）

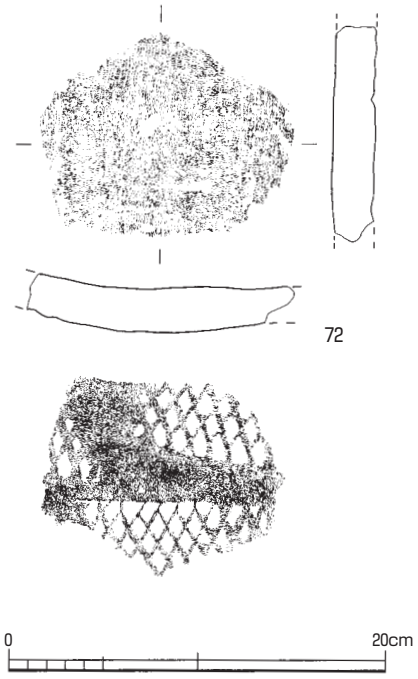
弥生土器高杯・壺、須恵器杯身・杯A・蓋・椀等をはじめ中国製磁器碗や銅銭が出土している。

弥生土器（73）は外面に凹線文をもつ高杯で、中期後半の特徴をもつ。74の壺も同様の時期のものである。

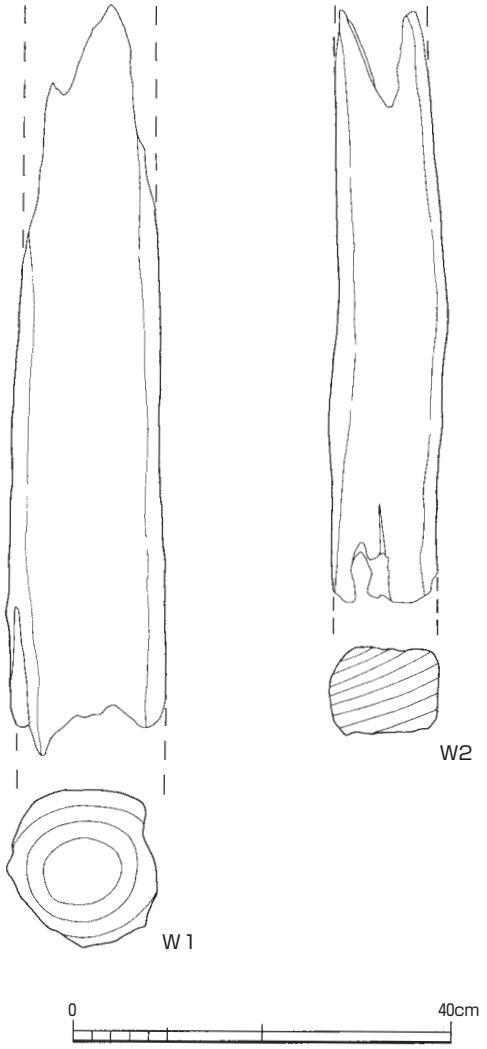
須恵器は杯身（78～80）・蓋（81）・椀（82）がある。78～80の杯身は7世紀前半に比定され、81の稜椀の蓋は８世紀後半のものであろうか。82の底部回転糸切りの椀は11世紀後半のものと考えられる。



第32図　SK8出土土器



第33図　P41出土瓦

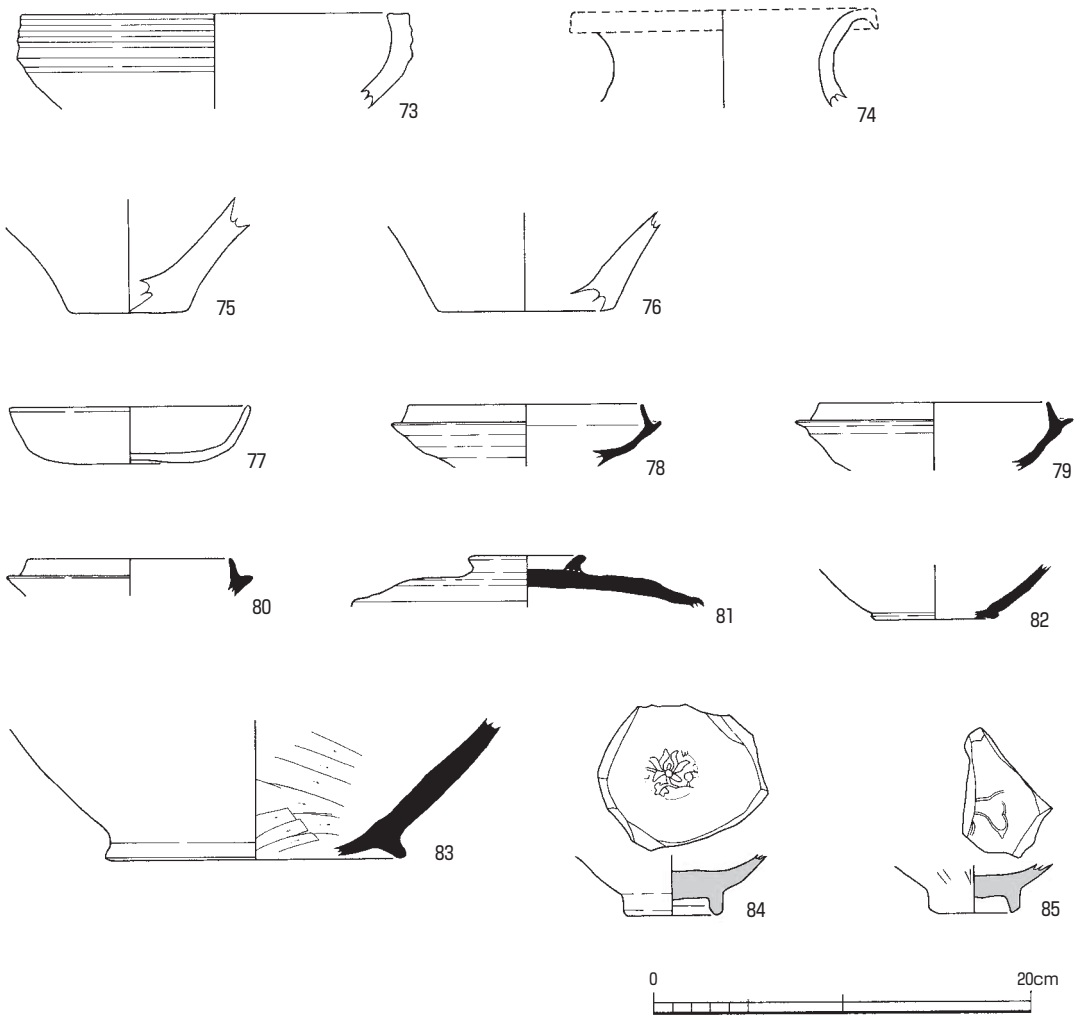


第34図　P46出土木製品

84・85は龍泉窯系の青磁碗である。見込みには花文が描かれ、外面は細蓮弁文を施す。16世紀前半～中葉に比定される。

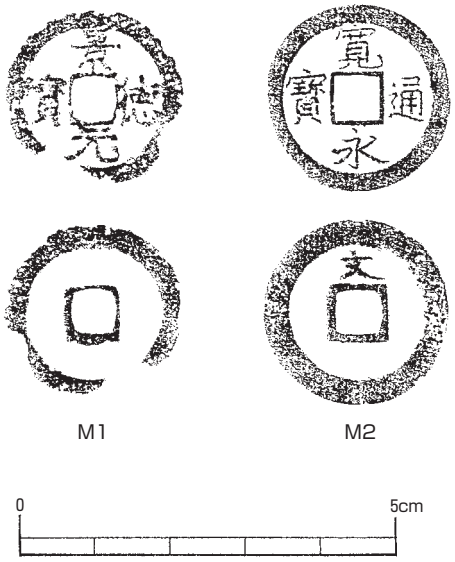
銅銭は中国銭（Ｍ１）と「寛永通寶」（Ｍ２）がある。Ｍ１は北宋銭の「景徳元寶（初鋳：1004年）」である。Ｍ２の寛永通寶は、裏面に「文」の文字を刻む。

以上、遺構出土の遺物を中心に、今回の調査で出土した遺物を概観した。土塁の盛土内からは、古墳時代、飛鳥・奈良時代、平安時代、鎌倉時代から室町時代の土器が出土している。新しい段階の遺物は、おおよそ15世紀から16世紀後半までの丹波焼を中心とした土器が出土している。土塁の構築時期がこの時期まで遡る可能性をもつ。堀内の土器については、12世紀から19世紀前半までと幅広い時期の土器や瓦を含む。



第35図　包含層出土土器

参考文献
伊野近富　1995 「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
森内秀造・池田征弘　2010 「東播窯・神出窯・三木窯・魚住窯」 特別展図録『古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺－』MIHO　MUSEUM他
山本信夫　1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
野上建紀　2000 「磁器の編年　碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
大槻　伸　2010 「丹波窯・北摂窯」 特別展図録『古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺－』MIHO　MUSEUM
市本芳三　1995「瓦」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
長谷川眞　2004 「Ⅳ遺物　B中近世の遺物　1　土器・陶磁器　(1) 土師器・土師質土器」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県文化財調査報告　第270冊　兵庫県教育委員会
岡崎正雄他　1989 『中尾城跡－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ＸＩ』 兵庫県教育委員会
亀井明徳　1975「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古希記念古文化論攷』鏡山猛先生古希記念論文集刊行会



第36図　包含層出土銭

軒丸瓦

報告番号	瓦当部							胴部							備考
	巴文			連珠文	外縁部		全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	凸面	凹面				
	巴頭部	断面形	巴尾		幅(cm)	高さ(cm)					切断痕	吊り紐痕	布目痕	釘穴	
19	尖る	四角形	1/2回転以内	15＋	2.2	0.9	－	－	瓦当：1.7	－	－	－	－	－	長石粒含む　軟質
20	丸い	半円形	1/2回転以上	21	1.6	1.3	31.5	13	2.4	ナデ調整	コビキA	有	有	有：径1.3cm	瓦当面：離れ砂須恵質

丸瓦

報告番号	胴部							備考
	凸面	凹面			全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
	調整	切断痕	吊り紐痕	布目				
12	ハケ調整		有	有：7本／cm	－	11.25	2.3	軟質（土師質）
26	ナデ調整	コビキA	Eタイプ	有：9本／cm	30.3	13.9	2.35	瓦質　工具側面によるタタキ

軒平瓦

報告番号	瓦当部		外縁部			平瓦					備考
	中心飾り	唐草文	幅(cm)	高さ(cm)	左右外縁幅	広端部(cm)	狭端部(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	
21	宝華？	有	0.7	0.5	－	－	－	2.1	ナデ調整	ナデ調整	瓦当：離れ砂　須恵質
22	立花？	有	0.8	0.6	4.0以上	－	－	1.75	ナデ調整	ナデ調整	瓦質
23	－	有	0.9	0.5	4.4	－	－	1.85	ナデ調整	ナデ調整・離れ砂	瓦質
24	扇	有	1.3	0.4	4.4	－	－	2.05	ナデ調整	ナデ調整	瓦質　中心飾り：山崎氏家紋
25	宝華	有	0.6	0.4	4.5	－	－	1.9	ナデ調整	ナデ調整・離れ砂	瓦質　桟瓦

平瓦

報告番号	広端部(cm)	狭端部(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	備考
27	21.8	19.5	2.2	ナデ調整	ナデ調整・離れ砂	瓦質
57	－	－	2.4	布目：8本/1cm	ナデ調整	須恵質
58	－	－	1.9	離れ砂	ナデ調整	須恵質
72	－	－	2.25	布目	格子タタキ	須恵質

表２　出土瓦詳細観察表

表３　出土遺物観察表

報告番号	出土地	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	長さ	幅	厚み	重量	備考
01	SK１	埋土	土師器	小皿	(13.4)	(1.95)						白色系　手づくね成形　口縁部ヨコナデ　摩滅著しい
02	SK１	埋土	須恵器	椀	(15.2)	(4.3)						内外面回転ナデ
03	SK１	埋土	白磁	皿		(1.45)	(3.7)					中国製磁器　高台内墨書「一月？」
04	SD１	埋土	須恵器	蓋	(10.8)	(1.95)						
05	SD１	石列南側の砂礫層	青磁	碗		(3.4)						龍泉窯系　外面鎬蓮弁文
06	SD１	最下層	陶器	擂鉢		(9.1)						丹波焼　内面擂り目（1回1条描き）使用による摩滅
07	SD３	埋土	土師器	小皿	(9.5)	(1.9)	(5.5)					白色系　外面指押さえ、口縁端部ヨコナデ　内面ナデ上げ
08	SD３	埋土	須恵器	蓋		(2.6)	ツマミ2.65					
09	SD３	埋土	須恵器	椀	(13.2)	(1.55)						外面口縁部一部ガラス化
10	SD３	埋土	土師器	鍋		(5.0)						外面斜タタキ目　内面ハケ目→ナデ
11	SD３	埋土	陶器	擂鉢		(7.9)						丹波焼　内面擂り目（1回1条描き）
12	SD３	埋土	瓦	丸瓦				(8.3)	11.25	2.3		
13	堀内	埋土	須恵器	椀	(15.3)	(4.4)						外面口縁端部吸炭（重ね焼き）
14	堀内	埋土	磁器	碗	(9.5)	(5.35)	(4.2)					肥前磁器　丸碗　外面草花文　高台畳付無釉
15	堀内	埋土	白磁	蓋	3.3	1.25						小壺蓋　鉄絵　内面無釉　関西系
16	堀内	埋土	白磁	紅皿	4.6	1.7	1.4					肥前磁器　型押し成形　外面無釉
17	堀内	埋土	青磁	皿		(2.1)						三田焼　型押し成形　内面花文陽刻　高台畳付無釉
18	堀内	埋土	陶器	甕	(36.5)	(8.6)						丹波焼
19	堀内	埋土	瓦	軒丸瓦					(12.1)	(1.7)瓦当		
20	堀内	埋土	瓦	軒丸瓦				31.5	13.05	2.4		
21	堀内	埋土	瓦	軒平瓦				(12.45)		2.1		
22	堀内	埋土	瓦	軒平瓦				(5.4)		1.75		
23	堀内	埋土	瓦	軒平瓦				(15.1)		1.85		
24	堀内	埋土	瓦	軒平瓦					(17.25)	2.05		
25	堀内	埋土	瓦	軒平瓦				(17.8)	(17.8)	1.9		
26	堀内	埋土	瓦	丸瓦				30.9	13.9	2.35		
27	堀内	埋土	瓦	平瓦				26.45	20.6	2.2		
28	十墓	盛土	土師器	甕	(20.4)	(8.15)						外面ハケ目　摩滅著しい
29	十墓	盛土	土師器	鍋	(32.4)	(9.9)						外面タタキ　内面ハケ目
30	十墓	盛土	土師器	鍋	(21.4)	(13.2)						外面タタキ　口縁端部丸くおさめる
31	十墓	盛土	土師器	鍋	(20.4)	(12.8)						外面タタキ　口縁端部玉縁状
32	十墓	盛土	土師器	鍋	(20.8)	(13.2)						外面タタキ　口縁部直立
33	十墓	盛土	土師器	鍋	(24.25)	(9.4)						外面タタキ
34	十墓	盛土	土師器	鍋	(19.3)	(7.8)						外面タタキ　内面当具痕　口縁部直立
35	十墓	盛土	土師器	鍋	(19.8)	(6.4)						外面タタキ　口縁端部丸くおさめる
36	十墓	盛土	須恵器	蓋	(11.0)	(3.9)						天井部回転ヘラ削り
37	十墓	盛土	須恵器	坏身	(12.5)	(3.9)						底部回転ヘラ削り
38	十墓	盛土	須恵器	坏	(11.0)	(3.35)	(7.1)					底部回転ヘラ切り
39	十墓	盛土	須恵器	坏	(12.8)	(3.5)	(8.3)					底部回転ヘラ切り
40	十墓	盛土	須恵器	坏		(3.05)	(9.3)					
41	十墓	盛土	須恵器	坏		(2.25)	(11.0)					
42	十墓	盛土	須恵器	盤		(3.4)	(18.3)					
43	十墓	盛土	須恵器	椀	(14.7)	(3.1)						
44	十墓	盛土	須恵器	椀	(13.8)	(2.5)						
45	十墓	盛土	須恵器	椀		(1.6)	(6.2)					
46	十墓	盛土	須恵器	椀		(1.5)	(5.2)					
47	十墓	盛土	須恵器	捏鉢	(24.5)	(7.6)						外面指押さえ
48	十墓	盛土	青磁	碗	(14.0)	(4.3)						龍泉窯系　無文
49	十墓	盛土	白磁	碗		(2.7)	(7.0)					
50	十墓	盛土	陶器	擂鉢	(25.1)	(4.8)						丹波焼
51	十墓	盛土	陶器	擂鉢		(4.3)	(10.0)					丹波焼
52	十墓	盛土	陶器	擂鉢	(40.2)	(6.2)						丹波焼
53	十墓	盛土	陶器	捏鉢	(30.4)	(14.65)	(13.9)					丹波焼
54	十墓	盛土	陶器	甕	(22.6)	(7.1)						丹波焼
55	十墓	盛土	陶器	甕	(34.1)	(7.3)						丹波焼
56	十墓	盛土	陶器	甕	(47.6)	(13.6)						
57	十墓	盛土	瓦	平瓦				(7.5)	(7.15)	(2.4)		
58	十墓	盛土	瓦	平瓦				(8.45)	(6.7)	1.9		
59	SK6	埋土	土師器	小皿	(8.0)	(1.85)	(3.45)					淡褐色系　口縁端部2箇所黒化（灯明皿？）
60	SK7	埋土	弥生	壺		(5.8)	頸(15.2)					押圧凸帯
61	SK7	埋土	弥生	高杯	(27.9)	(1.7)						
62	SK7	埋土	弥生	壺		(4.0)	(8.8)					
63	SK7	埋土	弥生	甕		(6.1)	(6.1)					
64	SK7	埋土	弥生	甕		(3.35)	(5.2)					
65	SK7	埋土	弥生	壺		(5.35)	(10.1)					
66	SK8	埋土	須恵器	杯	(11.25)	(2.1)	(8.5)					杯Ａ　焼成不良
67	SK8	埋土	須恵器	杯		(1.75)	(7.15)					杯Ａ　底部ヘラ切り
68	SK8	埋土	須恵器	坏		(3.0)	(8.6)					杯Ｂ
69	SK8	埋土	須恵器	体部		(3.1)						「十」ヘラ記号
70	SK8	埋土	須恵器	壺		(4.0)	(11.3)					杯Ｂ　内面底部周縁指押さえ
71	SK8	埋土	須恵器	杯	(16.7)	(5.4)						杯Ｂ
72	P41	埋土	瓦	平瓦				(13.8)	(10.75)	(2.25)		凸面斜格子タタキ
73	包含層		弥生	高杯	(20.1)	(5.0)						凹線文
74	包含層		弥生	壺	(15.7)	(5.15)						
75	包含層		弥生	壺		(6.0)	(6.2)					
76	包含層		弥生	壺		(5.1)	(9.2)					
77	包含層		土師器	皿	(12.6)	(3.0)	(8.4)					
78	包含層		須恵器	坏身	(12.3)	(3.35)	(14.3)					
79	包含層		須恵器	坏身	(11.9)	(3.6)						
80	包含層		須恵器	坏身	(10.6)	(2.0)						
81	包含層		須恵器	蓋		(2.85)	ツマミ(6.2)					稜椀蓋
82	包含層		須恵器	椀		(2.9)	(6.3)					底部回転糸切り
83	包含層		須恵器	底部		(7.3)	(16.0)					
84	包含層		青磁	碗		(3.2)	(5.2)					龍泉窯系　細蓮弁文　見込み花文（蓮花）スタンプ　高台内無釉
85	包含層		青磁	碗		(2.6)	(4.0)					龍泉窯系　細蓮弁弁文　見込み花文ヘラ描き　高台内無釉
M1	包含層		鉄器	銭				2.5	2.4			「景徳元寶」(北宋：初鋳1004年)
M2	包含層		鉄器	銭				2.6	2.5			「寛永通寶」裏面「文」
S1	SD4		石製品	台石				(21.3)	12.4	10.15		2側面に摩り痕跡
S2	十墓	盛土	石製品	硯				(9.5)	(4.6)	(1.25)		小型
W1	P46	埋土	木器	柱材				(79.6)	(15.8)	16.6		
W2	P46	埋土	木器	建築部材				(62.9)	(11.6)	(9.6)		

第４章　総括

今回の調査において、土塁を検出した面を第１面上層、その盛土を除去した面を第１面下層、盛土や整地層などを除去し地山上で検出した面を第２面と捉えている。以下に若干のまとめを述べる。

出土遺物の時期

第１面では、SK1から13世紀代・16世紀代の遺物、SD1から８世紀前半や13世紀前半の遺物が出土している。第１面上層と下層を分ける土塁盛土内からは、６～８世紀代の須恵器、11世紀後半～12世紀前半の白磁、14世紀前半～15世紀中ごろの土師器鍋、15世紀後様～16世紀前様の青磁、13世紀後半～16世紀後半の丹波焼などが出土している。第２面とした地山上の遺構では、SK7から弥生中期後半の壺や高坏、SK8から８世紀後半の須恵器が出土している。また、第２面上の包含層（調査区北側の整地層）からは弥生中期、８世紀後半、11世紀後半、16世紀前半～中葉の遺物が出土している。

遺構面の時期

第１面上層は、土塁盛土内から出土した遺物が示す年代を上限とすれば、16世紀後半以降の面と考えられる。また、この面において土塁はすでに削平されており、土塁直上には近代に行われたグラウンド造成[1]の整地層（北壁６層）が堆積する。第１面下層は盛土を除去した箇所であるため、盛土内出土遺物が示す年代が下限と考えられ、遺物の出土時期から14世紀代～16世紀代と考えられる。第２面は土坑出土遺物から弥生中期から８世紀と考えられる。

遺構について

今回検出した土塁は、これまで存在が知られていないものである。出土遺物から16世紀後半の構築と考えられ、中世三田城を治めた有馬氏八代村秀以降十代国秀の時期にあたる。平成７年度に行った調査では、この時期をⅤ期として捕らえ、有馬氏の本城として体裁を整えられた時期としている。[2]また、土塁内出土の遺物は15世紀代が中心であり、前段階の土塁が存在した可能性も少なからず考えられる。

土塁に伴って検出した堀は、南北方向の空堀と東西方向の堀がある。調査区内で堀底まで検出が行えず、片方の肩の検出もできていない。そのため堀の形態は不明である。検出した堀の肩はいずれも傾斜している。堀内から各時期にわたる遺物が出土しており、埋没時期の特定は困難である。南北の掘は、平成７年度の調査において渡り廊下部分から検出された堀の続きであると考えられる。この堀は、『三田城古地図』に記載された時点では描かれておらず、当時埋め戻されていたことがわかる。また、東西方向の堀の南側には堀が現存しており、この堀は半分ほど埋め戻されている。堀の掘削時期については、土塁の構築と密接に結びつくため、土塁の構築時期と同じと考えたい。

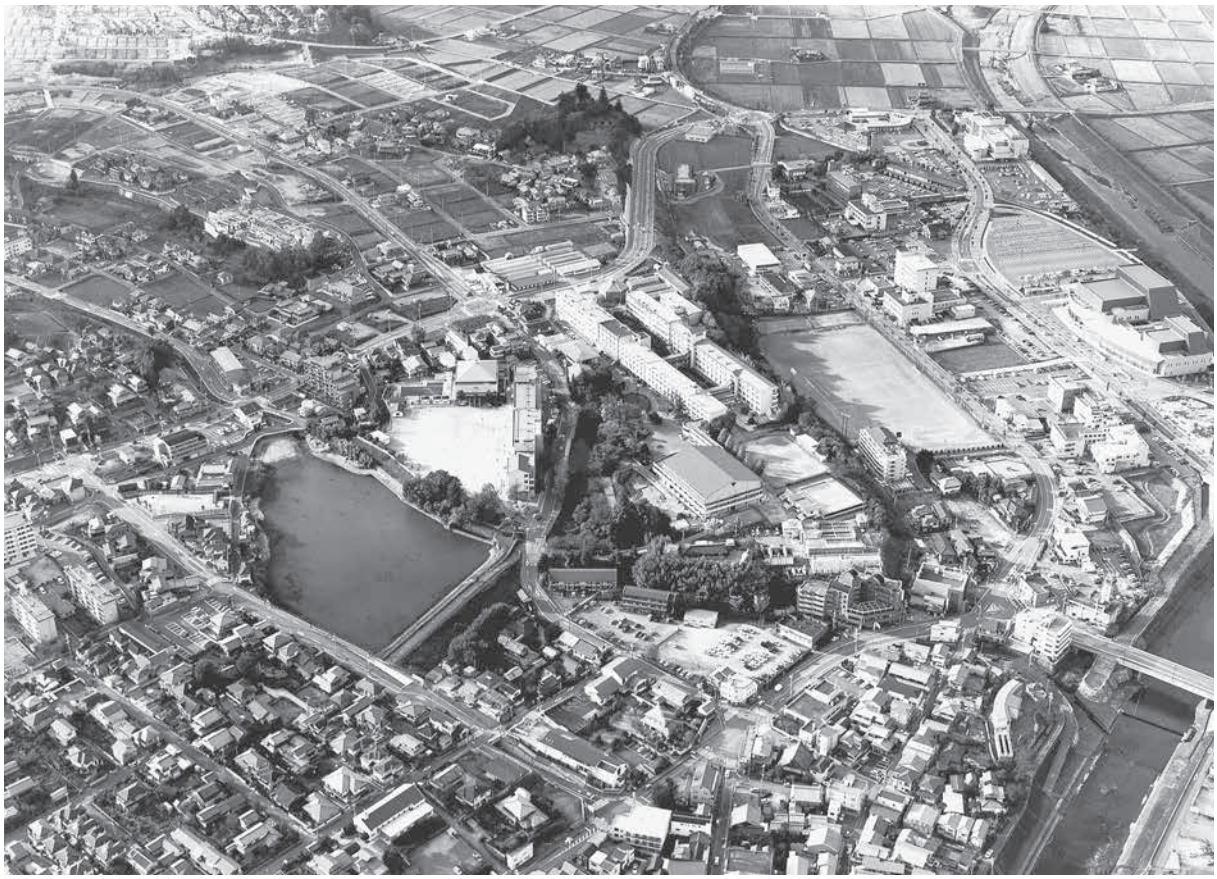
第２面では律令期の瓦や土器が出土している。金心寺関係の遺構などが三田城以前にあった可能性があるが、築城時に破壊されていることも考えられる。弥生時代の遺物の出土もあり、台地上に古くから人が住んでいたことが伺える。

【註】

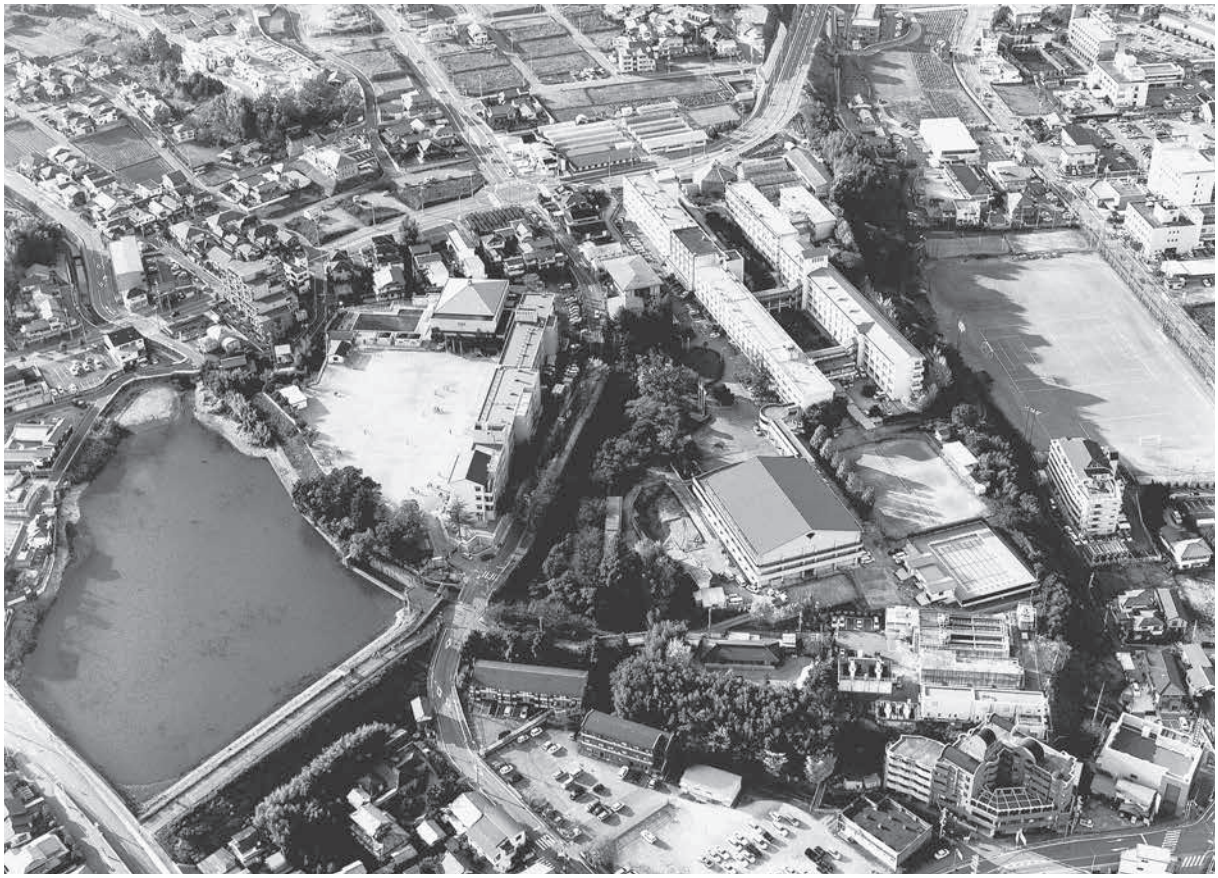
⑴　兵庫県立有馬高等学校百十周年記念誌委員会『兵庫県立有馬高等学校百十周年記念誌』（2006）によると、昭和28年（1953年）に運動場の拡張工事が生徒の手によって行われている。運動場を１ｍほど掘り下げ、その土で堀を埋め拡張を行ったとある。これによって多くの遺構が破壊されたと考えられる。

⑵　兵庫県教育委員会『三田城跡発掘調査報告書』（2000）　88頁　この報告書での時期設定に従うと、第１面上層はⅥ期以降、第１面下層はⅣ期～Ⅵ期、第２面はⅠ期～Ⅲ期にあてはまる。

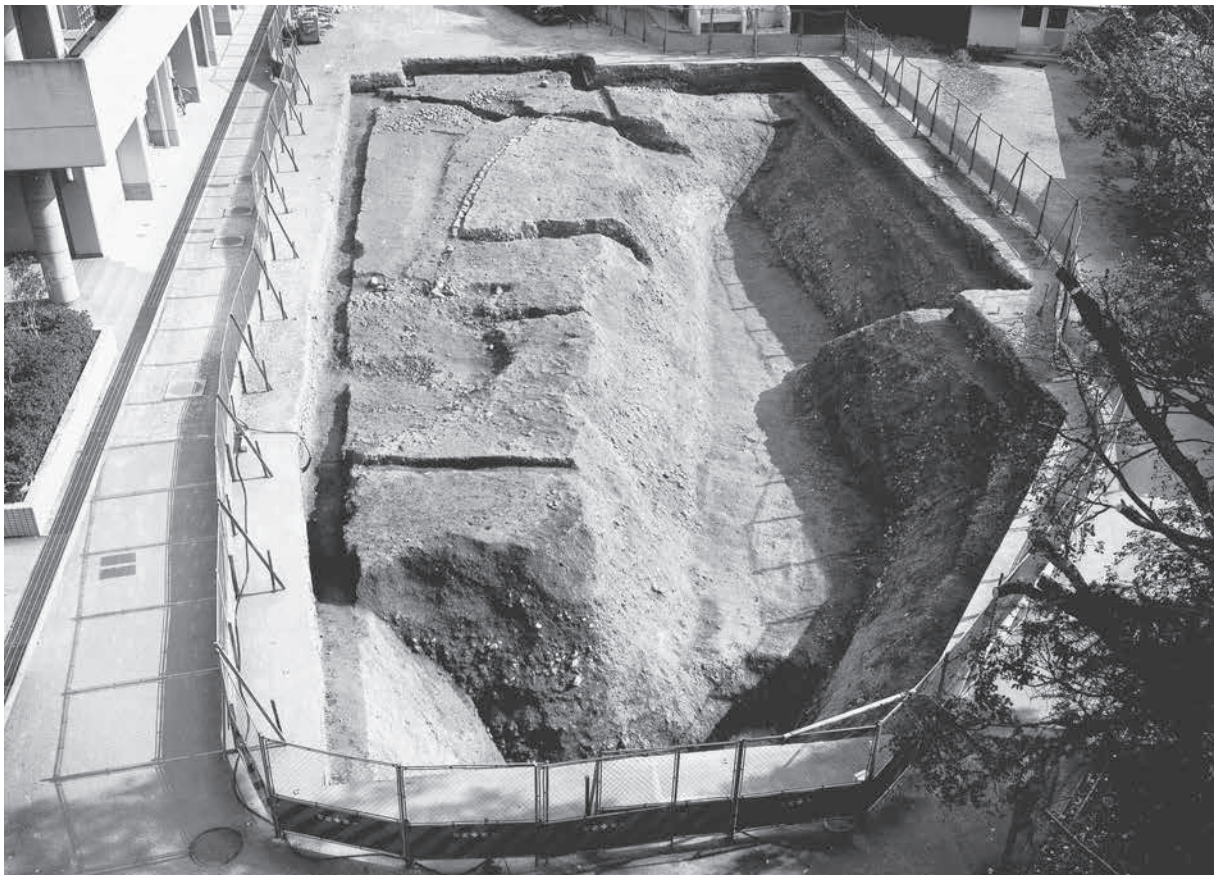
写　真　図　版



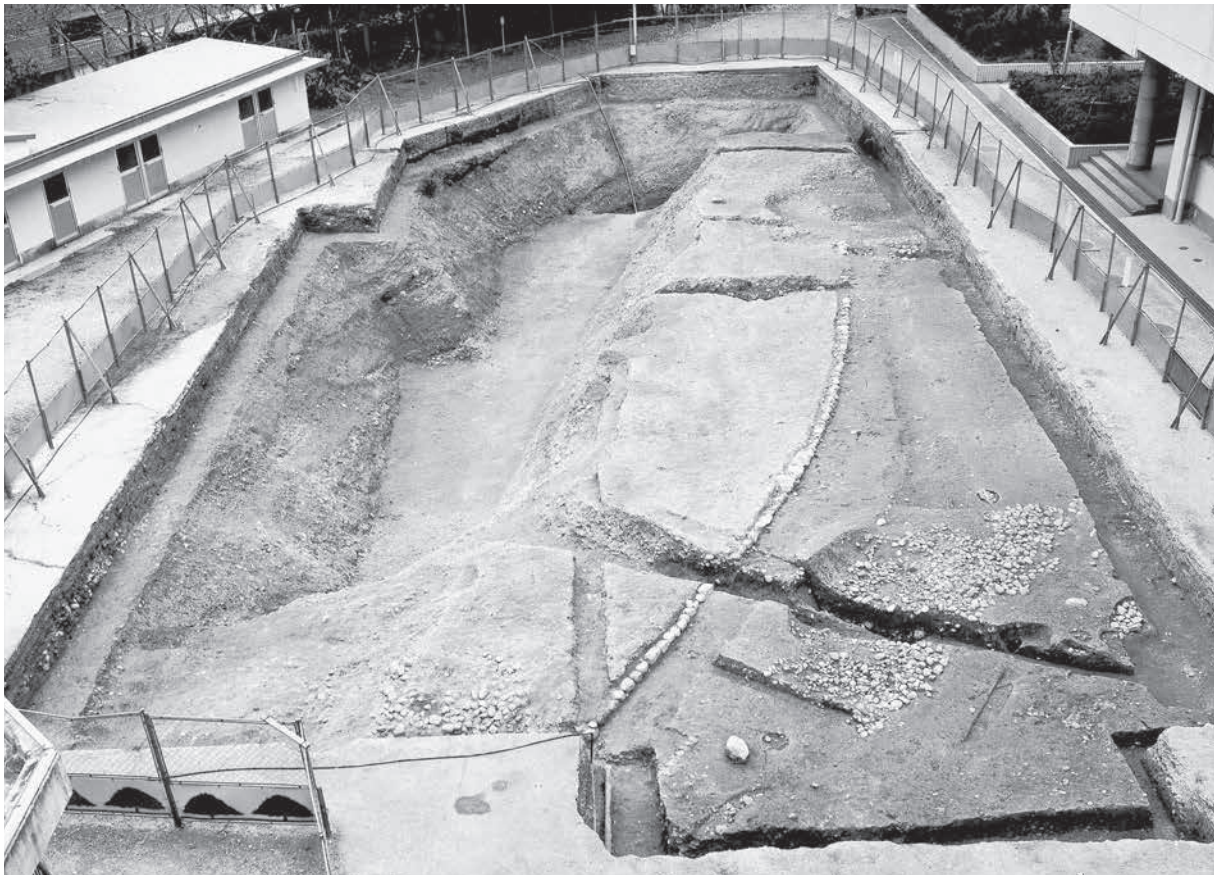
遺跡遠景（南東から）



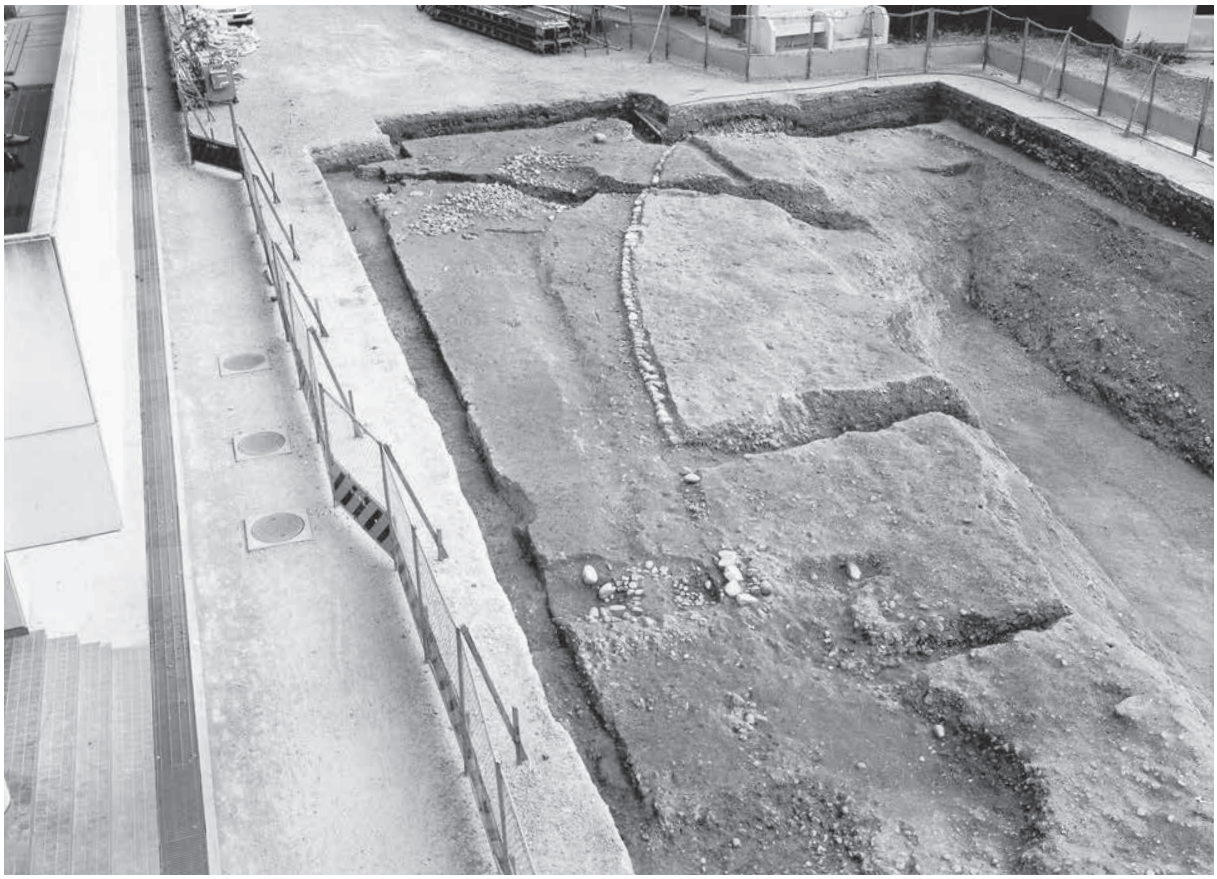
遺跡全景（南東から）



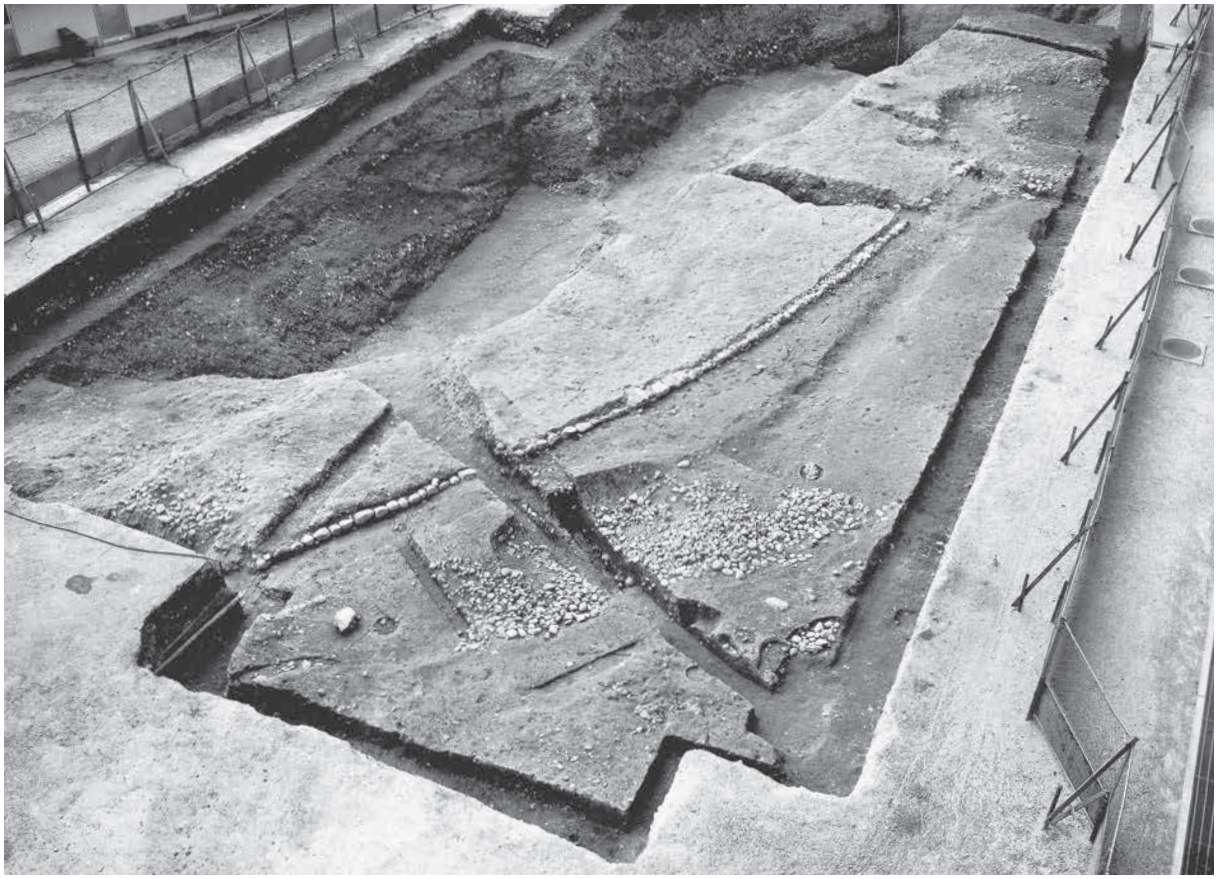
第１面上層全景（西から）



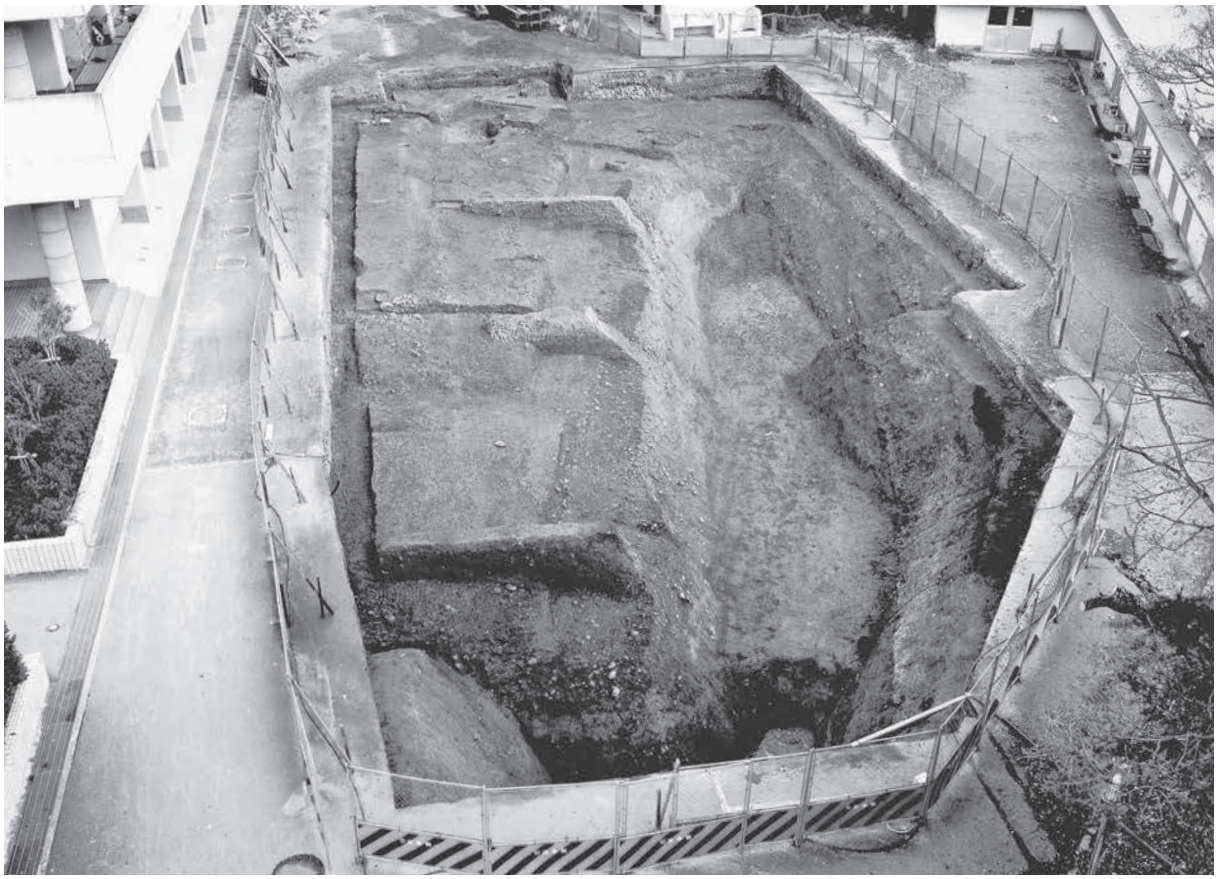
第１面上層全景（東から）



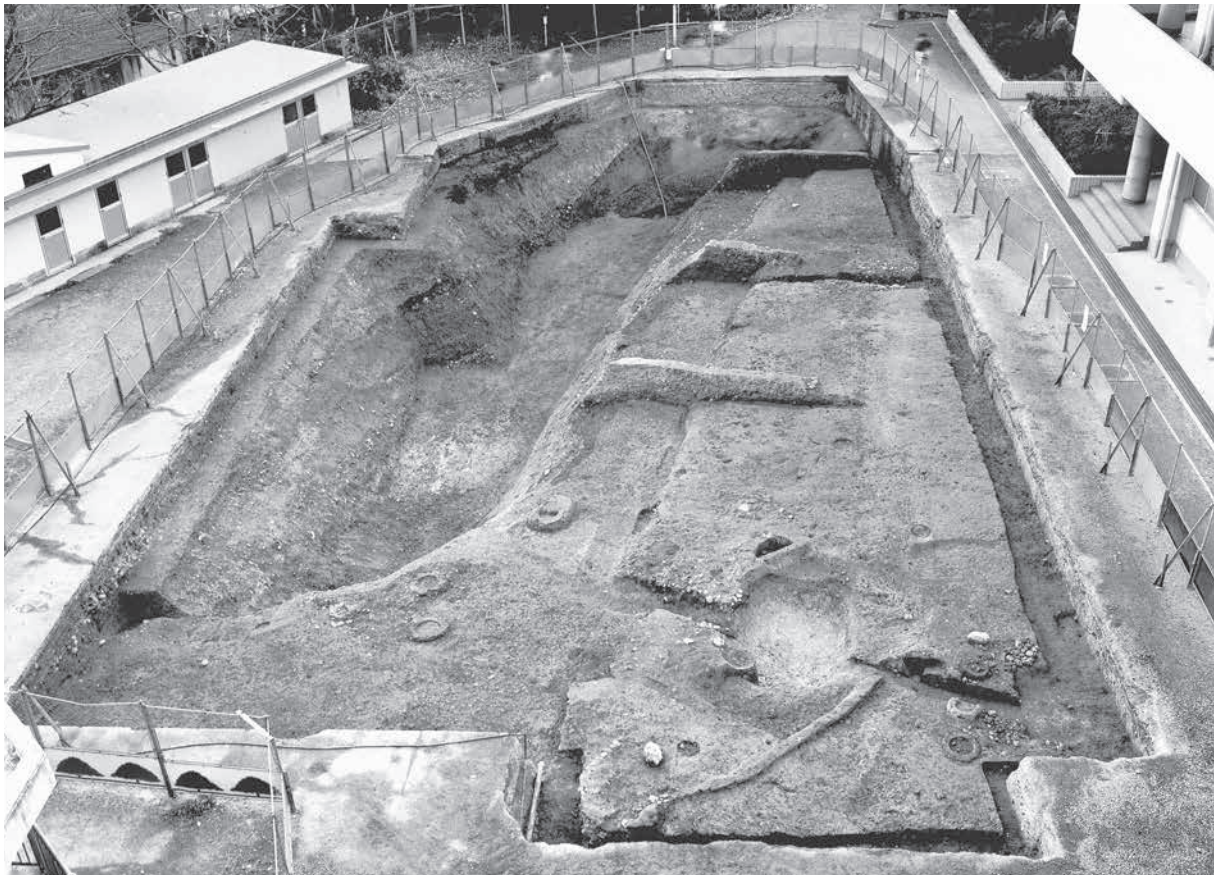
第１面上層（西から）



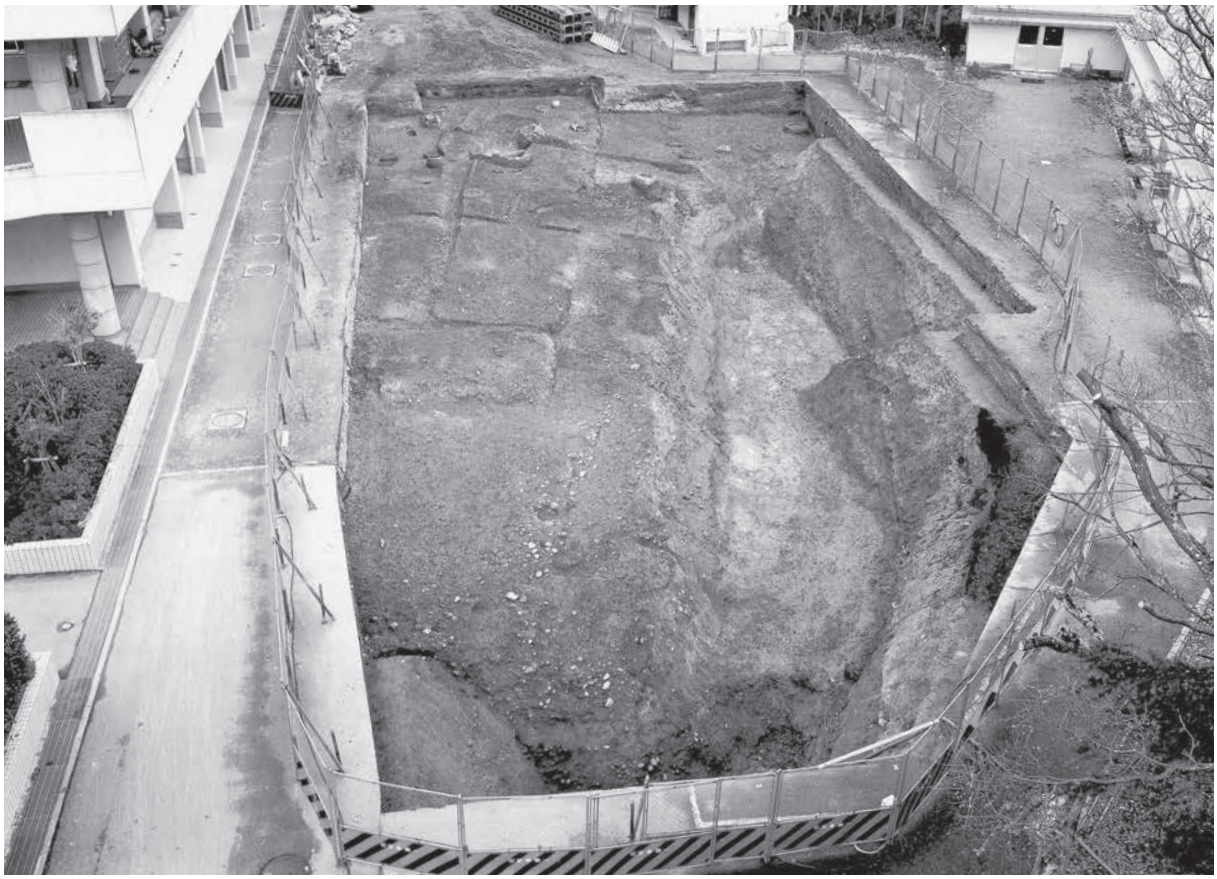
第１面上層（東から）



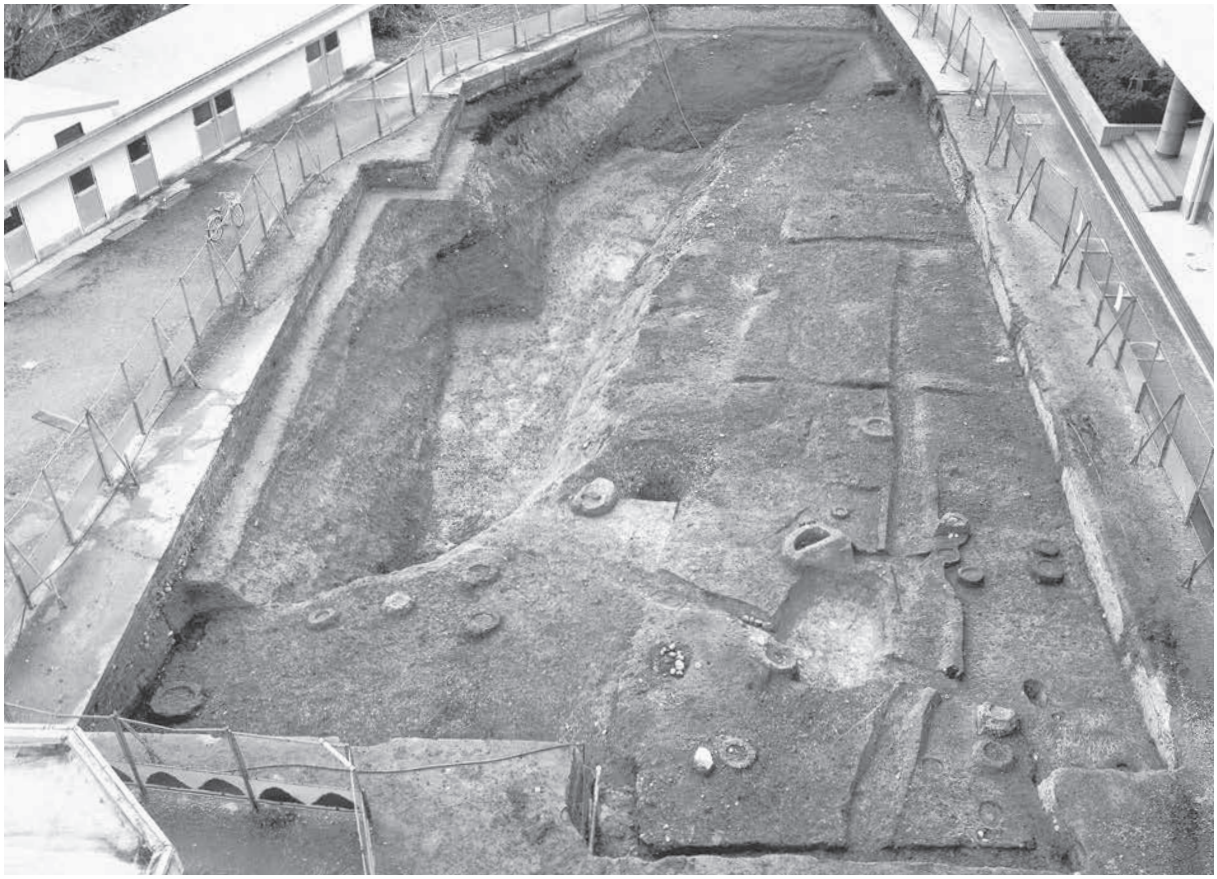
第１面下層全景（西から）



第１面下層全景（東から）



第２面全景（西から）



第２面全景（東から）

盛土セクション北部分
（南西から）

盛土セクション全景
（南東から）

盛土セクション全景
（南西から）

盛土セクション２（東から）

盛土セクション３（東から）

盛土セクション４（東から）

盛土セクション５（東から）

空堀断面（南から）

堀断面（東から）

土坑 SK1全景
（東から）

土坑 SK1断面
（東から）

土坑 SK1完掘
（東から）

土坑 SK5断面
（東から）

溝 SD1畦
（東から）

溝 SD3全景
（南から）

溝 SD3溝内の
石検出状況

溝 SD3完掘
（南から）

溝 SD4礫検出状況

溝 SD4畦（東から）

溝 SD5畦（東から）

柱穴 P8断面（東から）

柱穴 P9断面（南西から）

柱穴 P17断面（南から）

石列（東から）

石列（北東から）

石列　平石状況（北から）

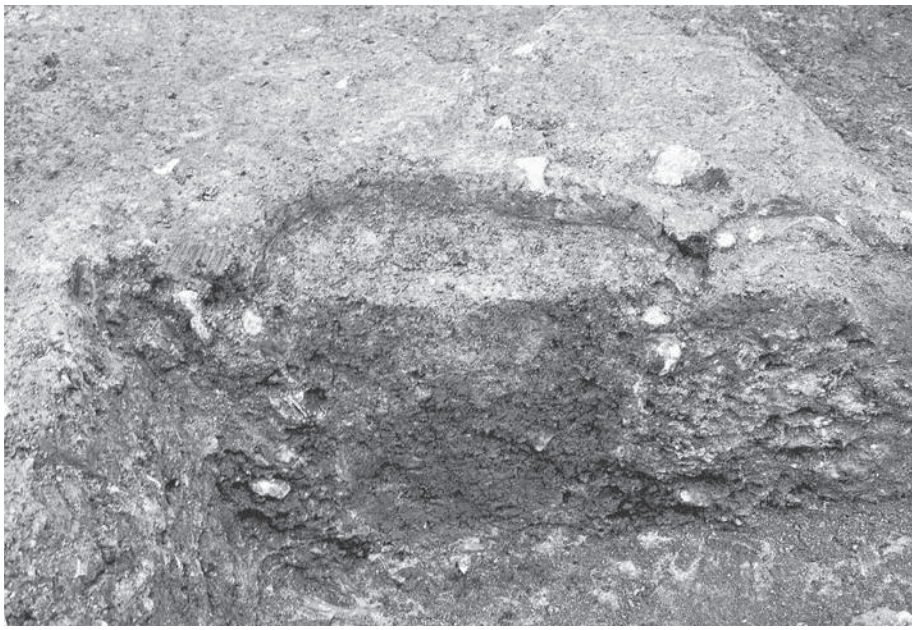
石列断面

石列の裏状況（南から）

土坑 SK6　石検出状況
（南から）

同上　全景
（南から）

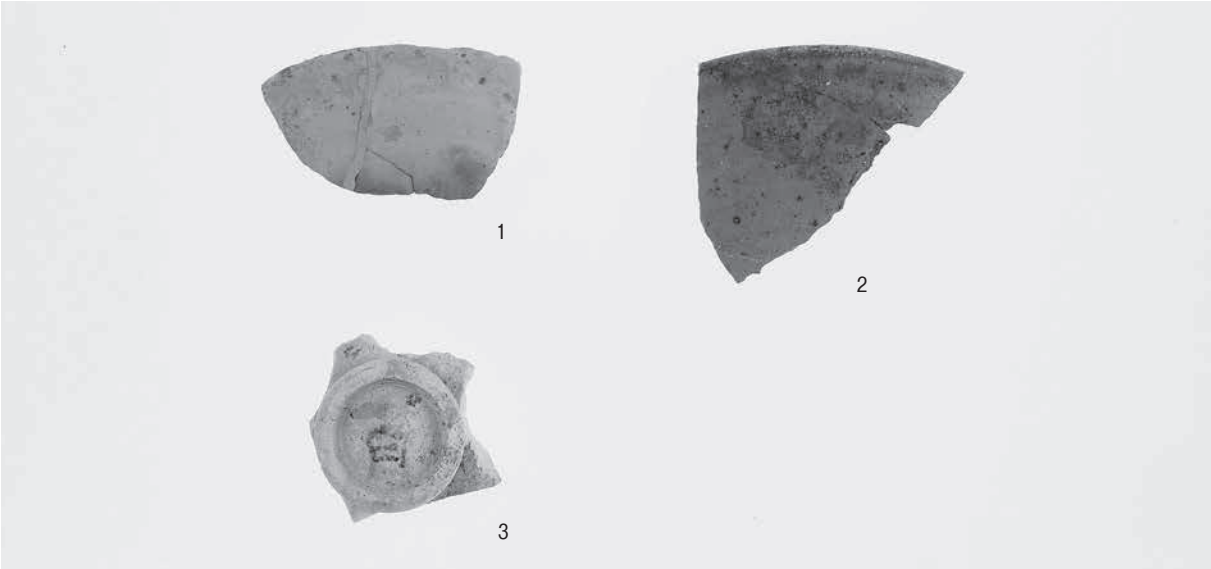
同上　断面



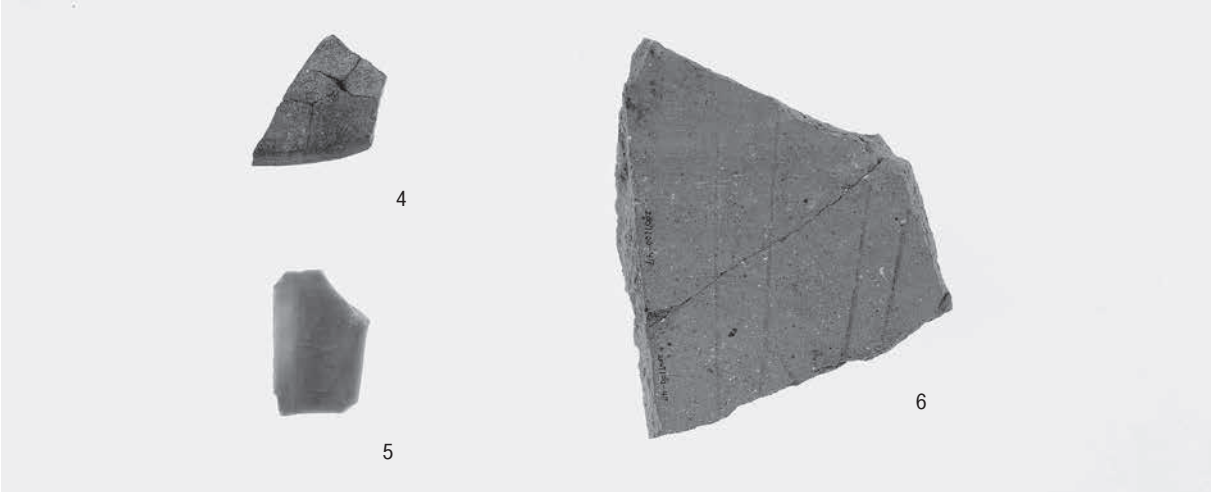
柱穴 P22断面
（南から）

柱穴 P46
（東から）

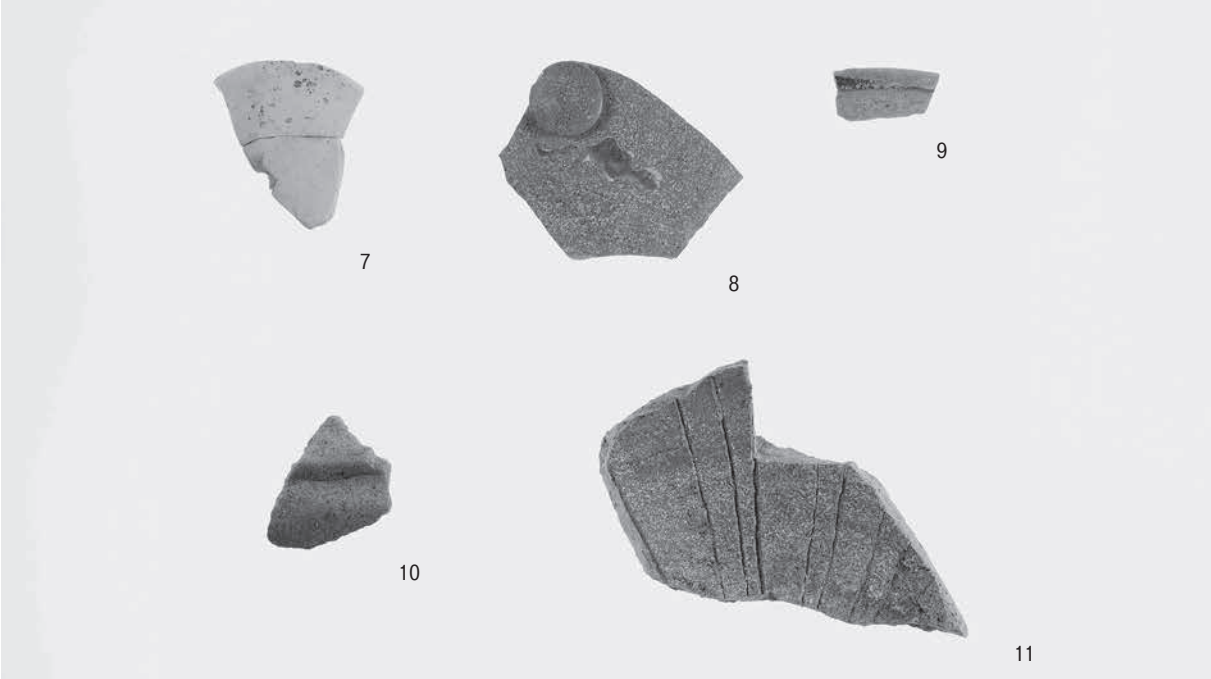
同上　完掘



SK1出土土器



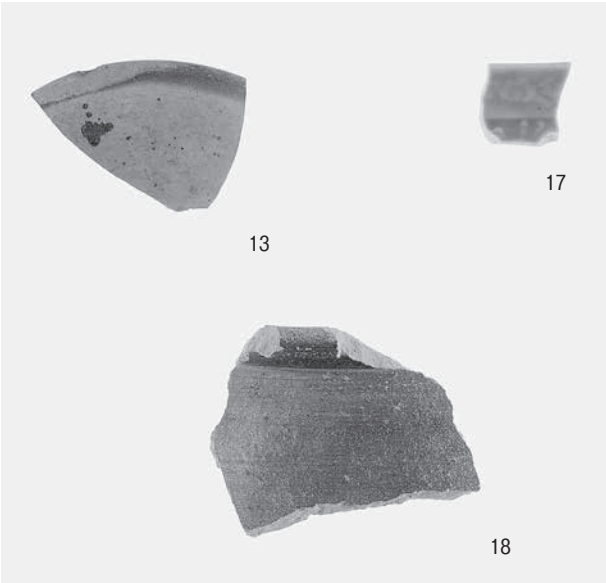
SD1出土土器



SD3出土土器

SD3出土瓦

SD4出土石製品



堀内出土土器

20

19

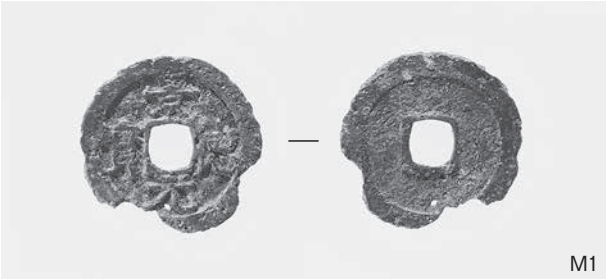
堀内出土軒丸瓦

堀内出土軒平瓦

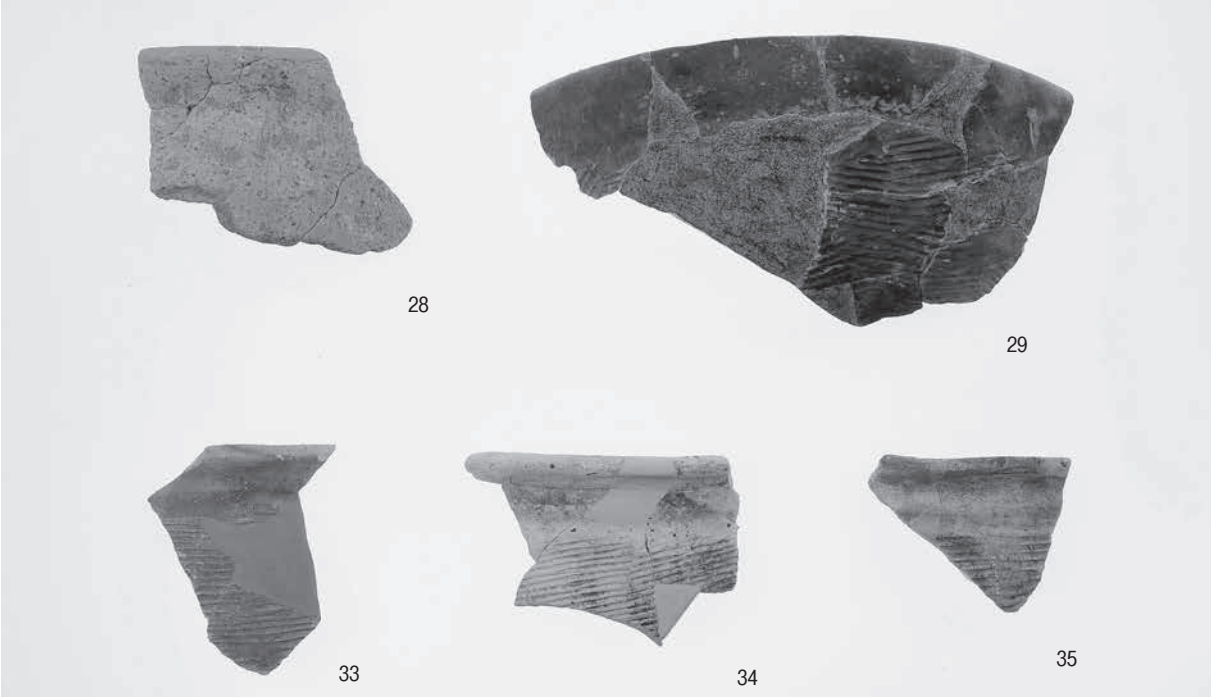
26

27

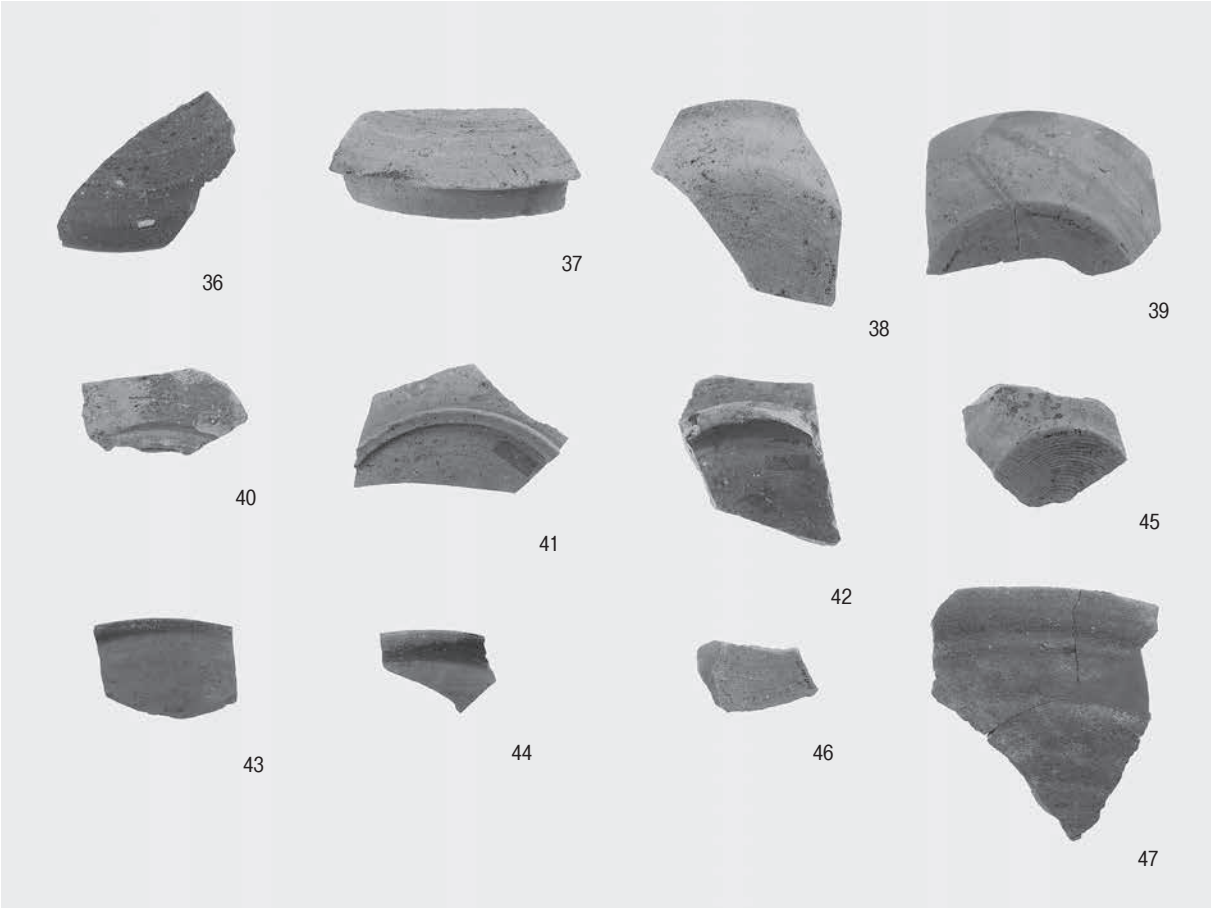
堀内出土丸瓦・平瓦



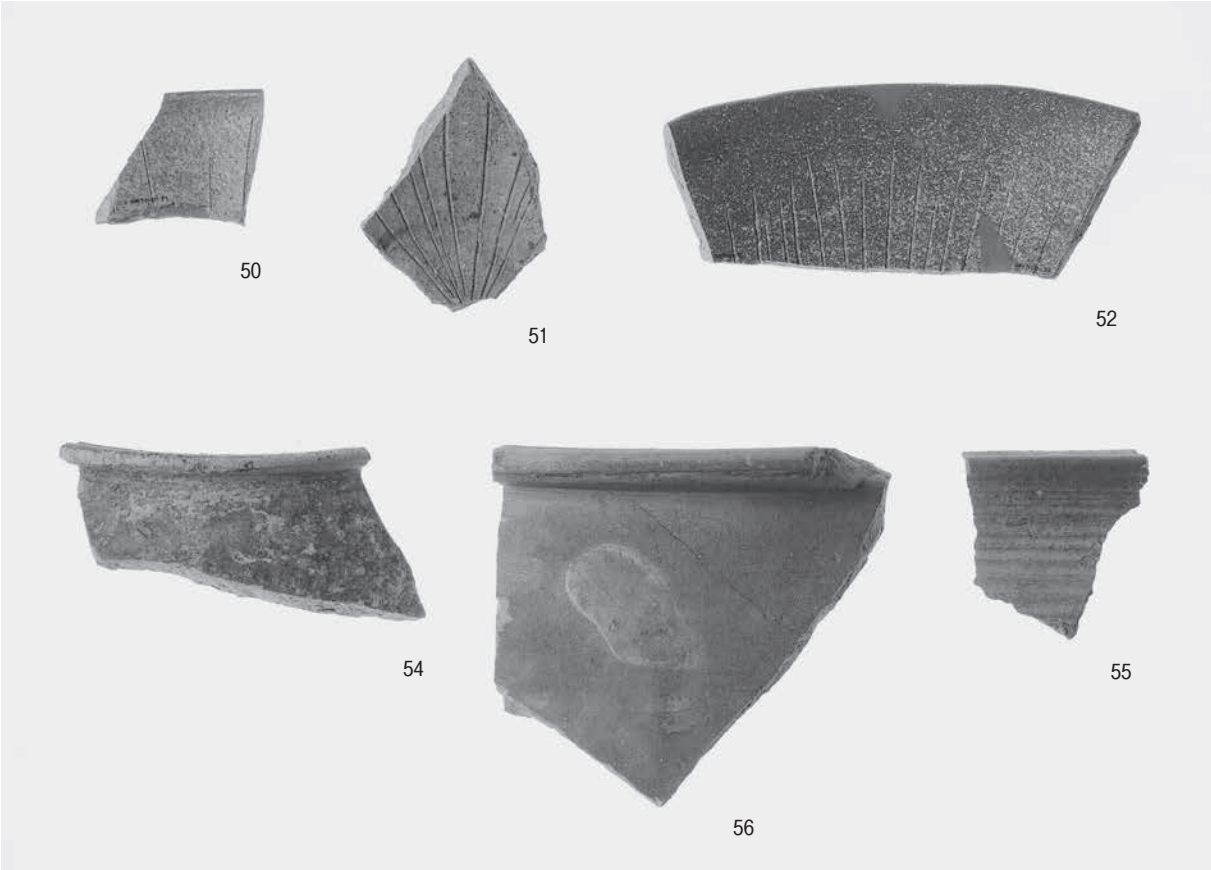
包含層出土銭



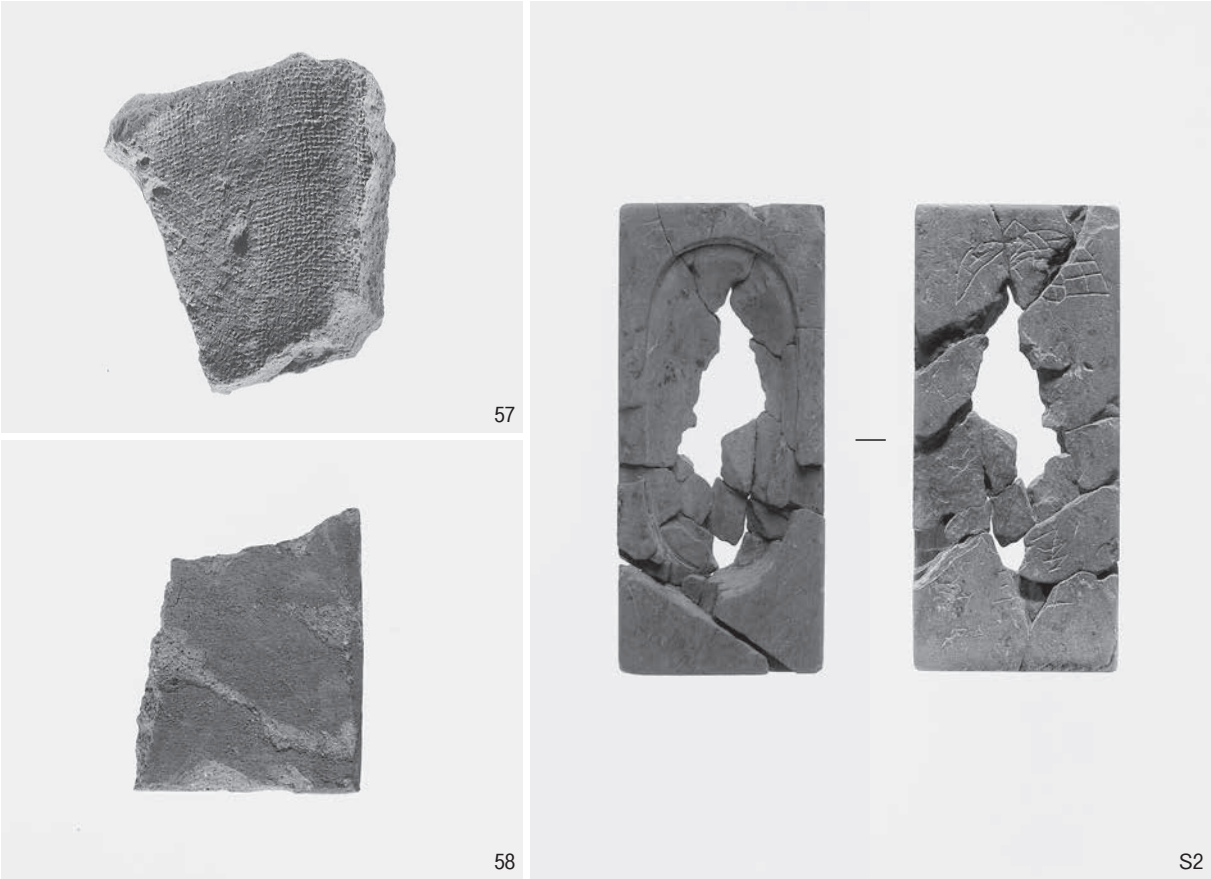
土墨内出土土器



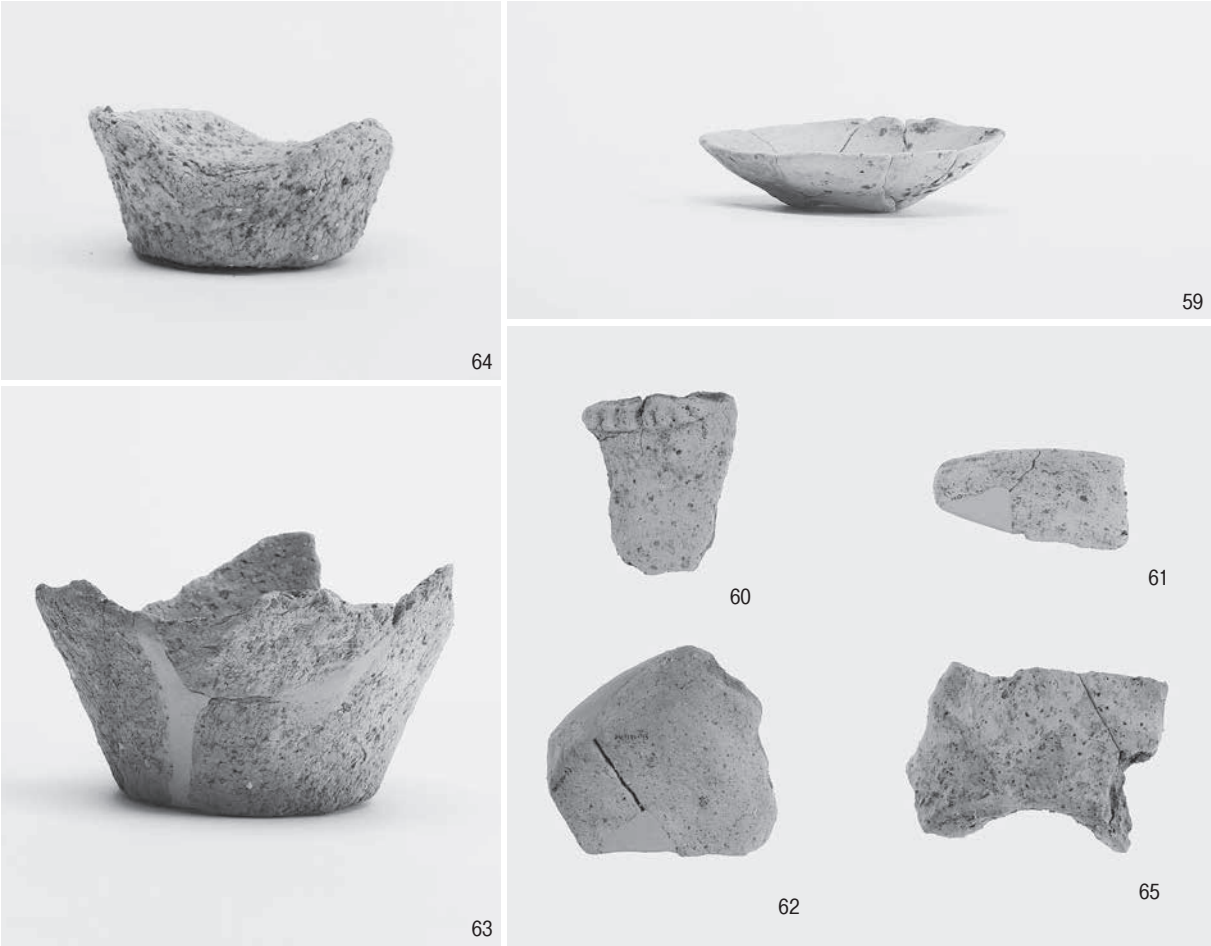
土墨内出土土器



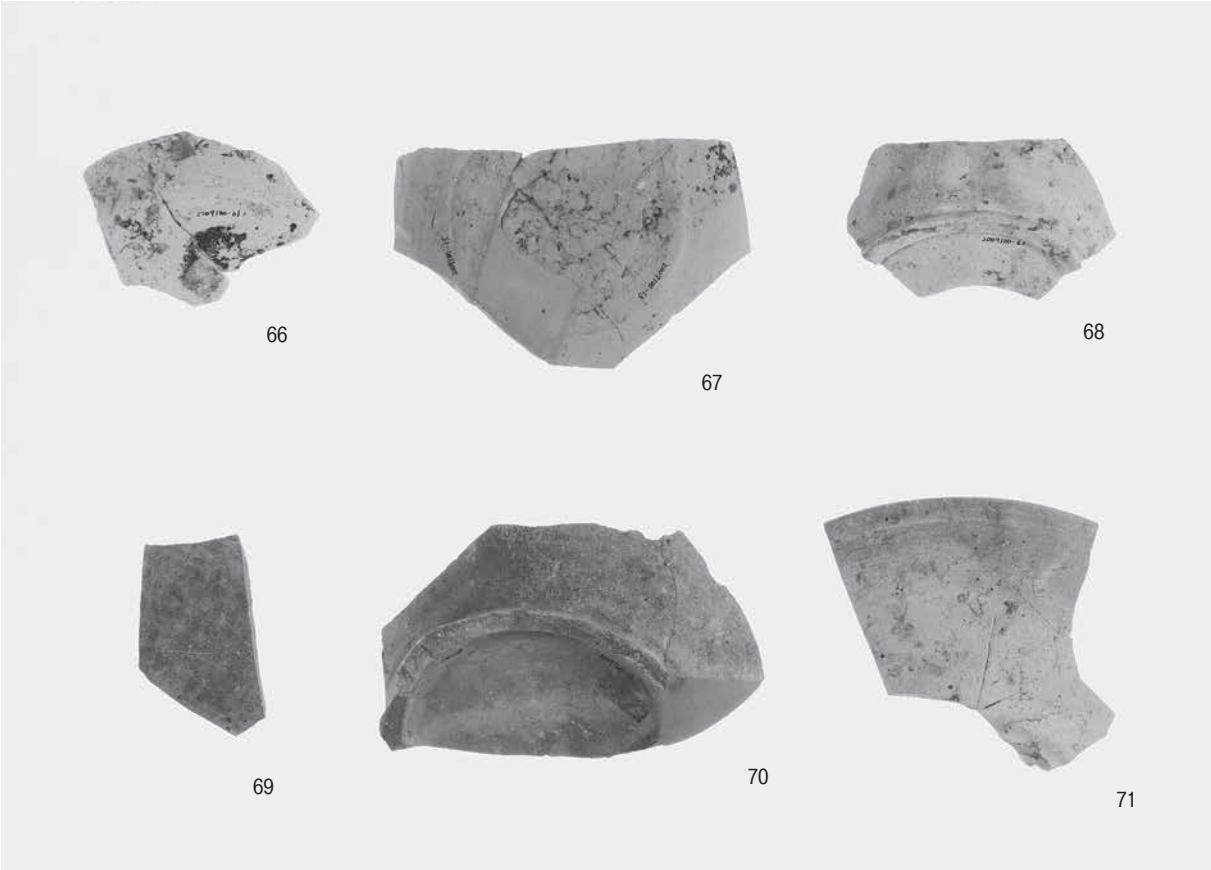
土墨内出土土器



土墨内出土瓦・硯



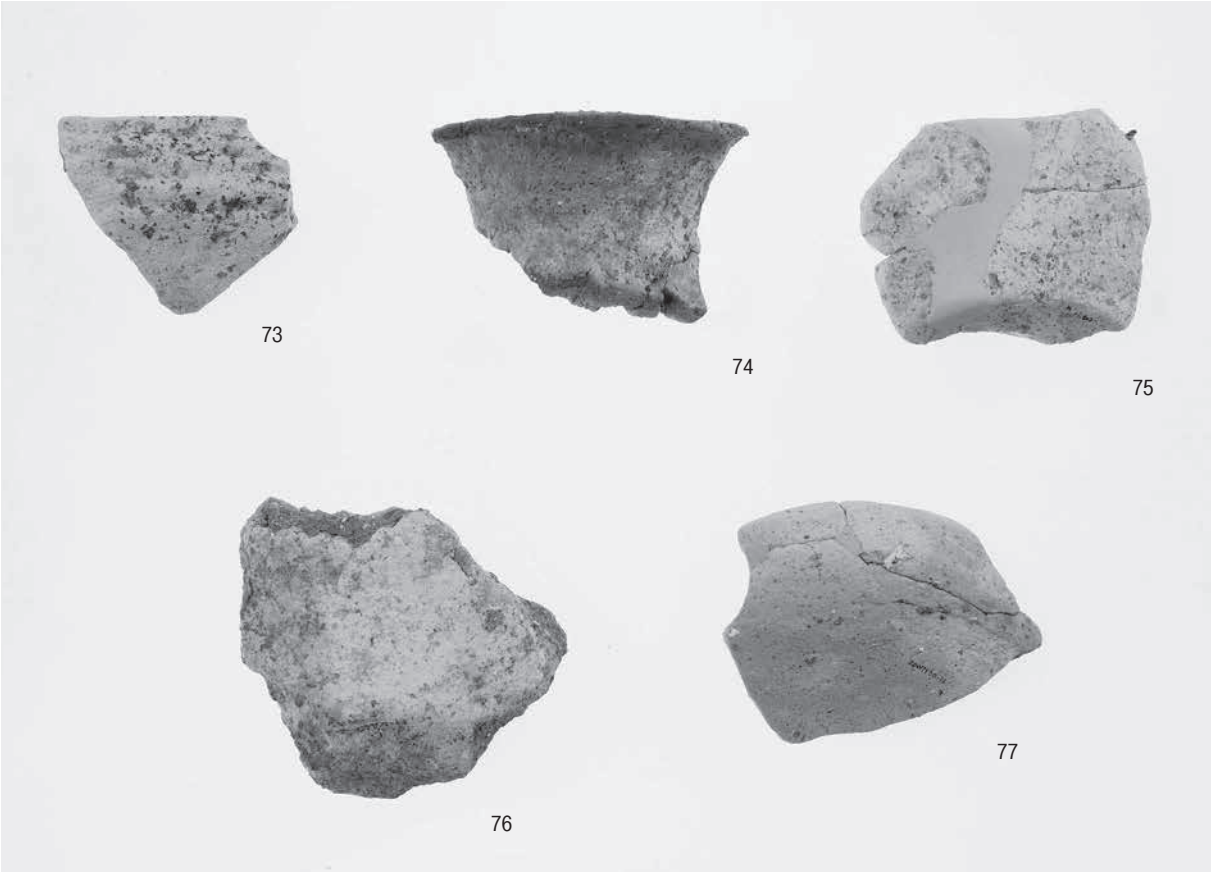
SK6・SK7出土土器



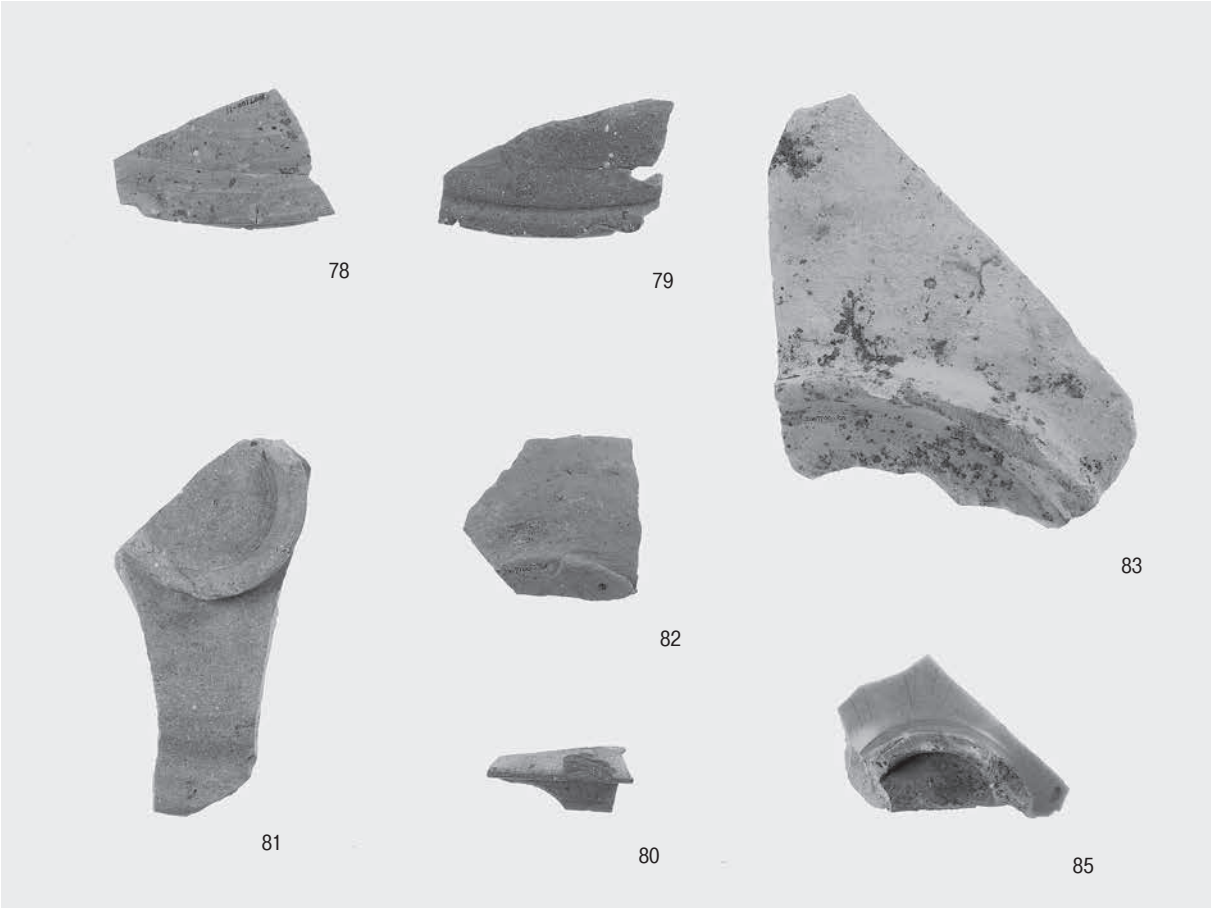
SK8出土土器

P41出土瓦

P46出土木製品



包含層出土土器



包含層出土土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	さんだじょうあと３
書名	三田城跡Ⅲ
副書名	県立有馬高等学校講義棟新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第421冊
編著者名	小川弦太　村上泰樹
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目１番１号　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	平成24(2012)年３月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三田城跡（さんだじょうあと）	兵庫県三田市天神（ひょうごけん さんだし てんじん）	28219	200157	34度53分14秒	135度13分00秒	2007.10.14～2007.12.18	599㎡	県立有馬高等学校講義棟新築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三田城跡	城館 集落	弥生 中世 近世	堀、土塁、溝、土坑、柱穴	弥生土器、須恵器、土師器（鍋）、三田青磁、輸入陶磁器、国内磁器、瓦	

要約	三田城に関する遺構を合計３面検出した。第１面上層とした面は16世紀後半以降の面と考えられ、土塁、堀、土坑を検出した。土塁は16世紀後半の構築と考えられる。第１面下層は土塁盛土を除去した面であり、土塁構築時の造成痕跡を検出した。第２面では、三田城以前の弥生時代中期、古代の遺構・遺物を検出した。

兵庫県文化財調査報告　第421冊

三　田　城　跡　Ⅲ

県立有馬高等学校講義棟新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月29日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39